

辯言

本書は余が久しく知遇を辱ふする臺灣總督府陸軍局郵便
 部長兼同局電信部事務官たる遞信書記官土居通豫君が今
 般公務の爲め上京せられ某學會の求めに應じ臺灣從來の
 交通と来
 論せられたるものなり其演説の本意は全く同島交通に關し縷々剴切に
 事は素より地理人情風俗教育農商工業に至るまで網羅し
 寶すべきの説かり因て君の許諾を得之を名けて臺灣嶋と
 云ひ世に公にすることゝはかしぬ而して卷中挿入する所



の寫眞は多くは英人某の凡そ半年餘同島の山河を跋渉して寫映する所にして其生蕃地に屬するものゝ如きは未だ曾てあらざる寫眞たり述者の珍藏せるを併せて請受け以て其事實を證明せり讀者開卷喫驚先以て臺灣の我版圖に歸したるの偶然にあらざるを知らん

明治廿九年三月

嵩山堂主人謹識

臺灣嶋目次

目	次
總論付歴史	一
海路付臺灣	七
鐵道	十六
陸路	十七
都會	二十
山水	二十三
電信	二十四
郵便	三十三
貨幣	四十六
衛生付飲食物	五十
兵備	七十四
行政	七十九

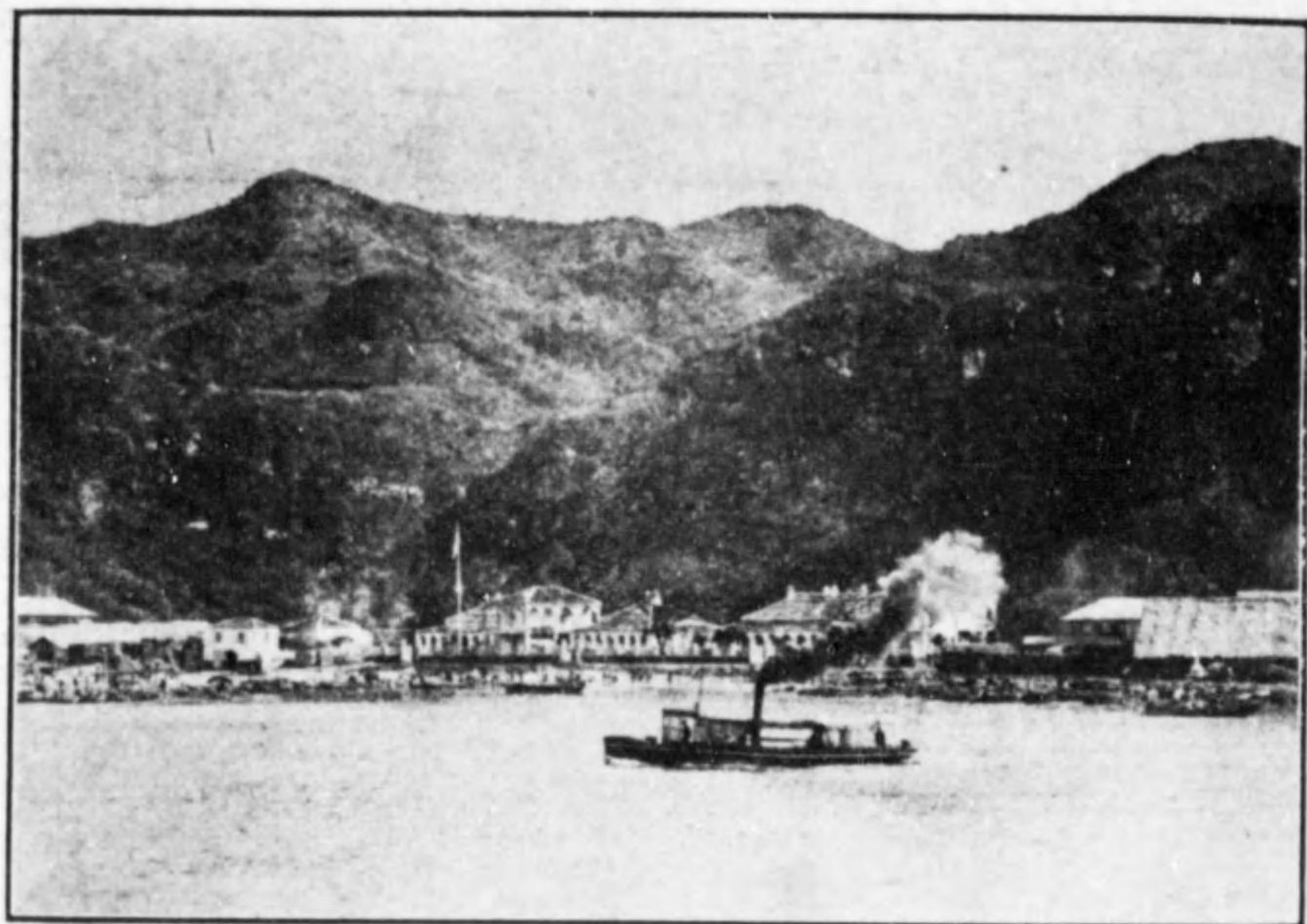


港 籠 鶴



港 水 淡

教育	：	：	：	八十三
租稅付戶籍、刑罰	：	：	：	八十五
殖産付鳥獸	：	：	：	八十八
工業付花樹	：	：	：	九十六
結論付商賣、言語	：	：	：	百〇二

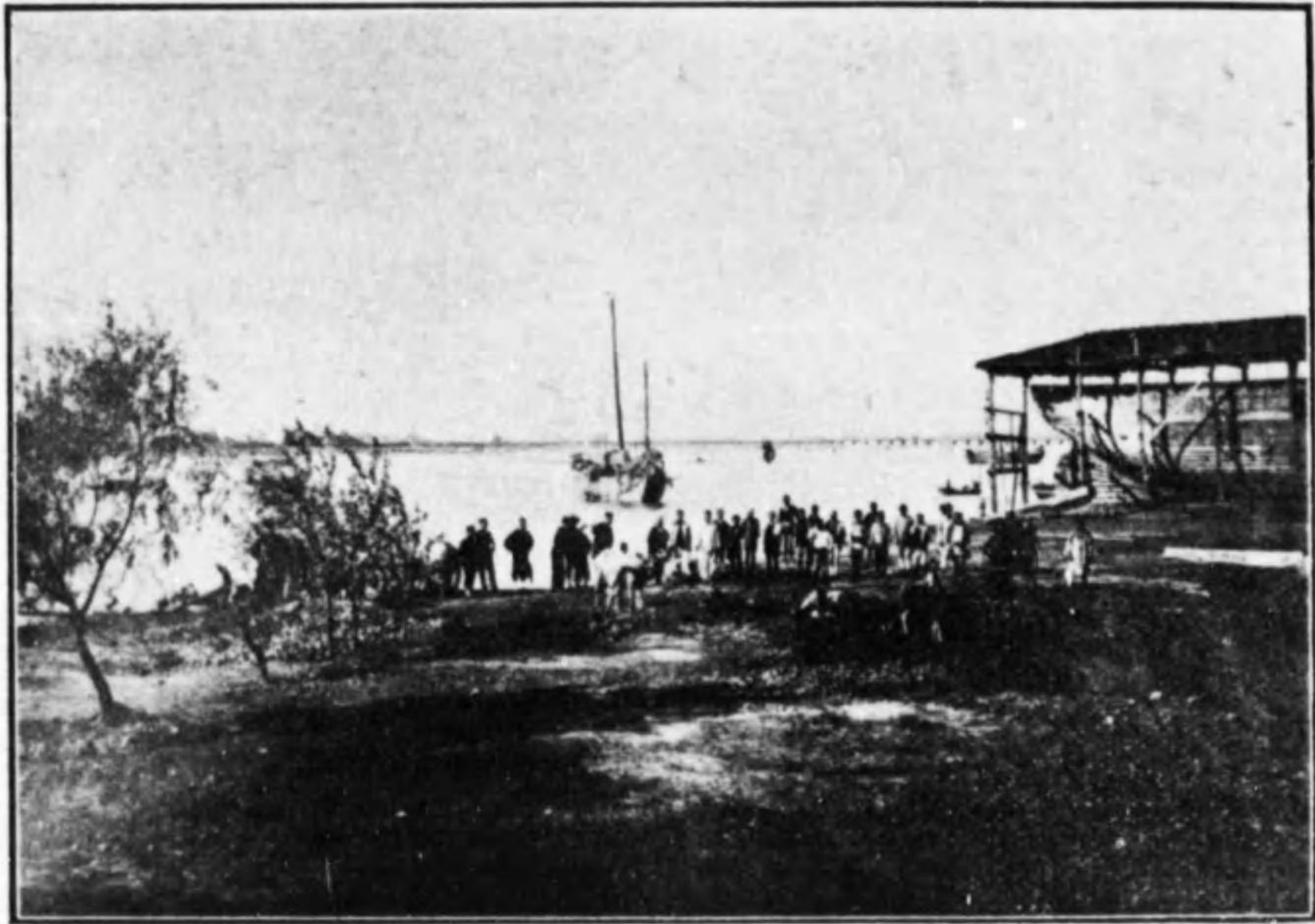


港 籠 鷄



港 水 淡

教育	八十三
租稅付戶籍、刑罰	八十五
殖産付鳥獸	八十八
工業付花樹	九十六
結論付商賣、言語	百〇二



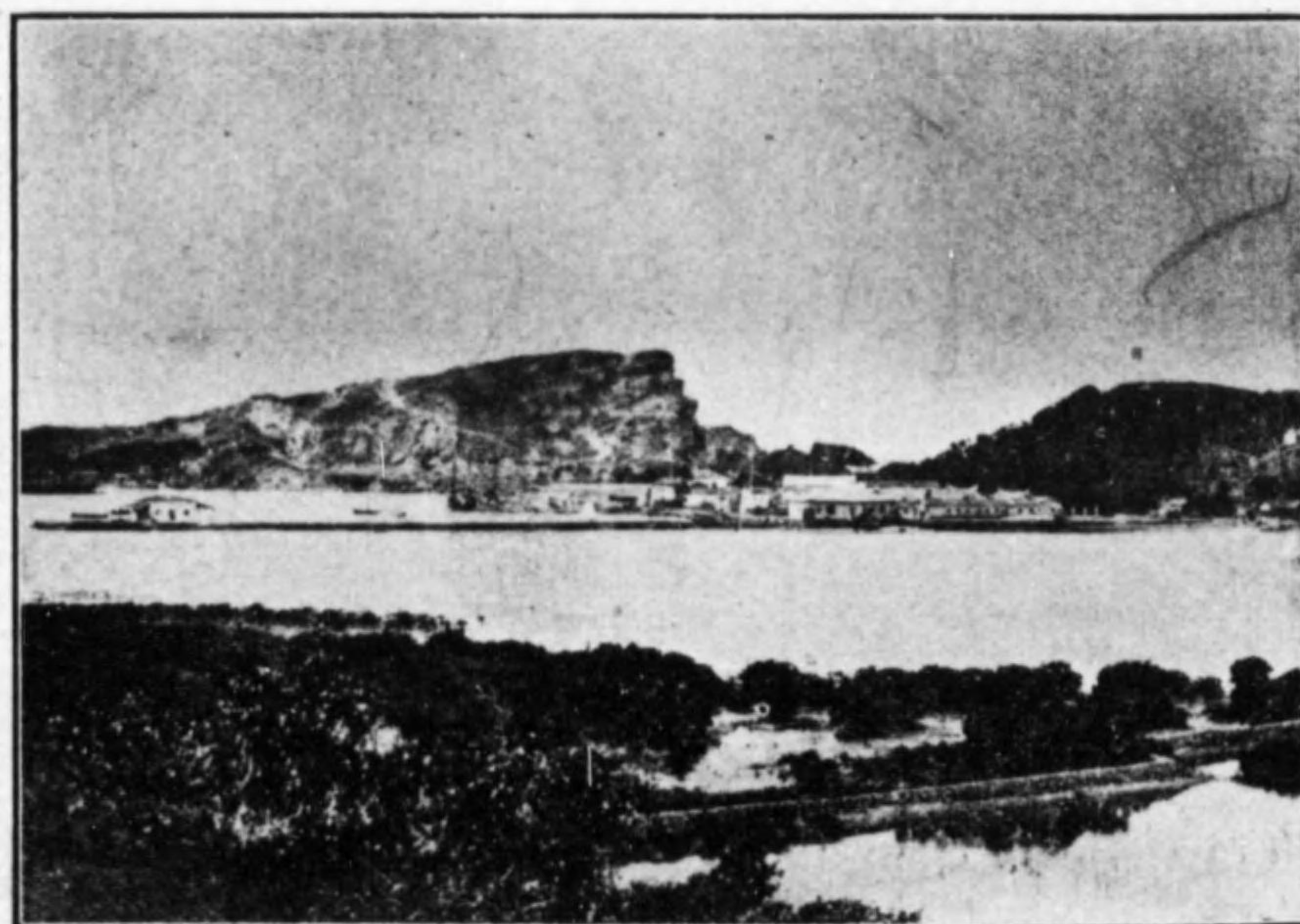
淡 水 鐵 橋



艇 舢 街 舢 付



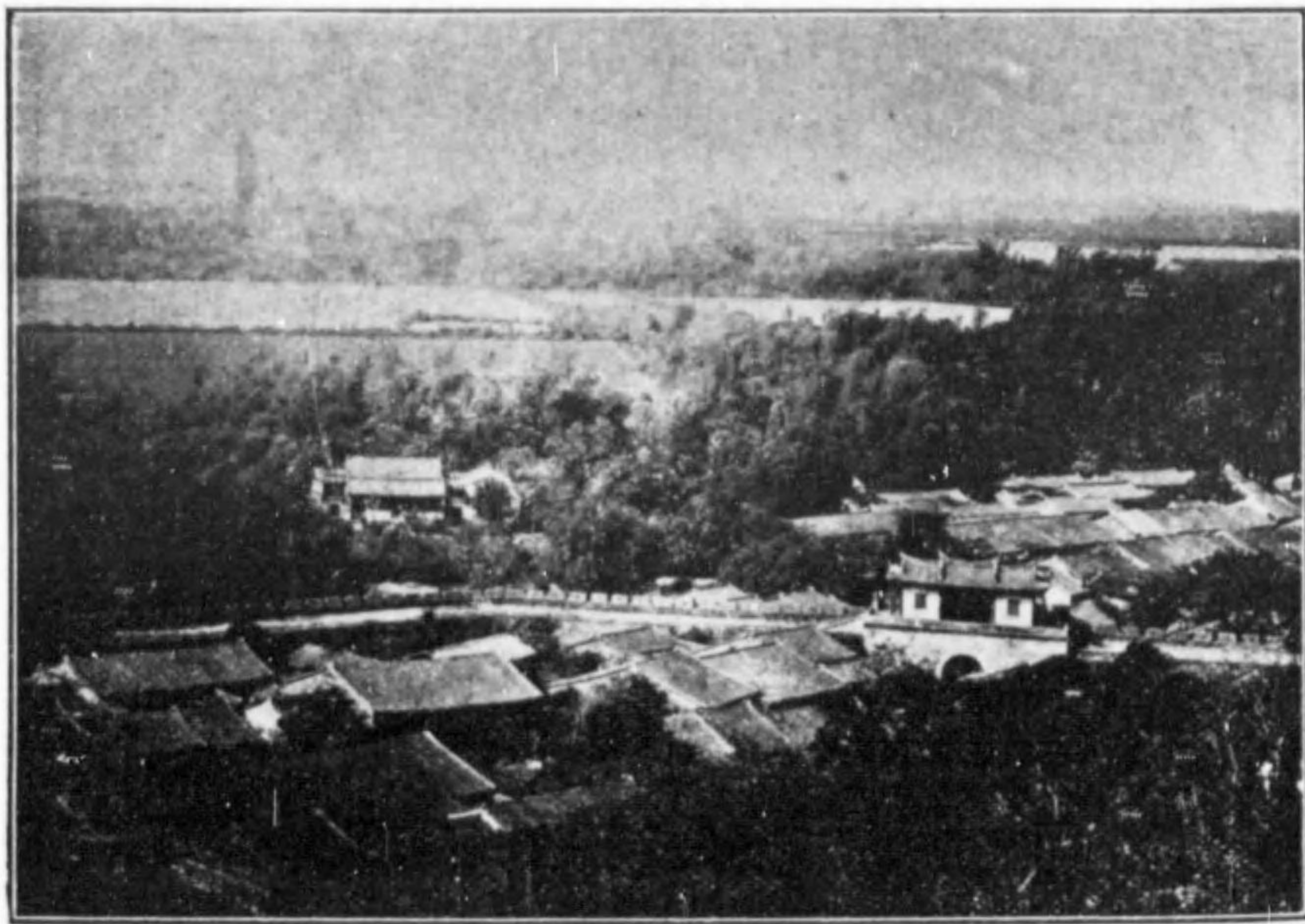
彭湖嶋



打狗港



臺北城內西街



臺南城



橋



居家蕃熟



落村蕃生



團集族社蕃生



男 壯 蕃 生

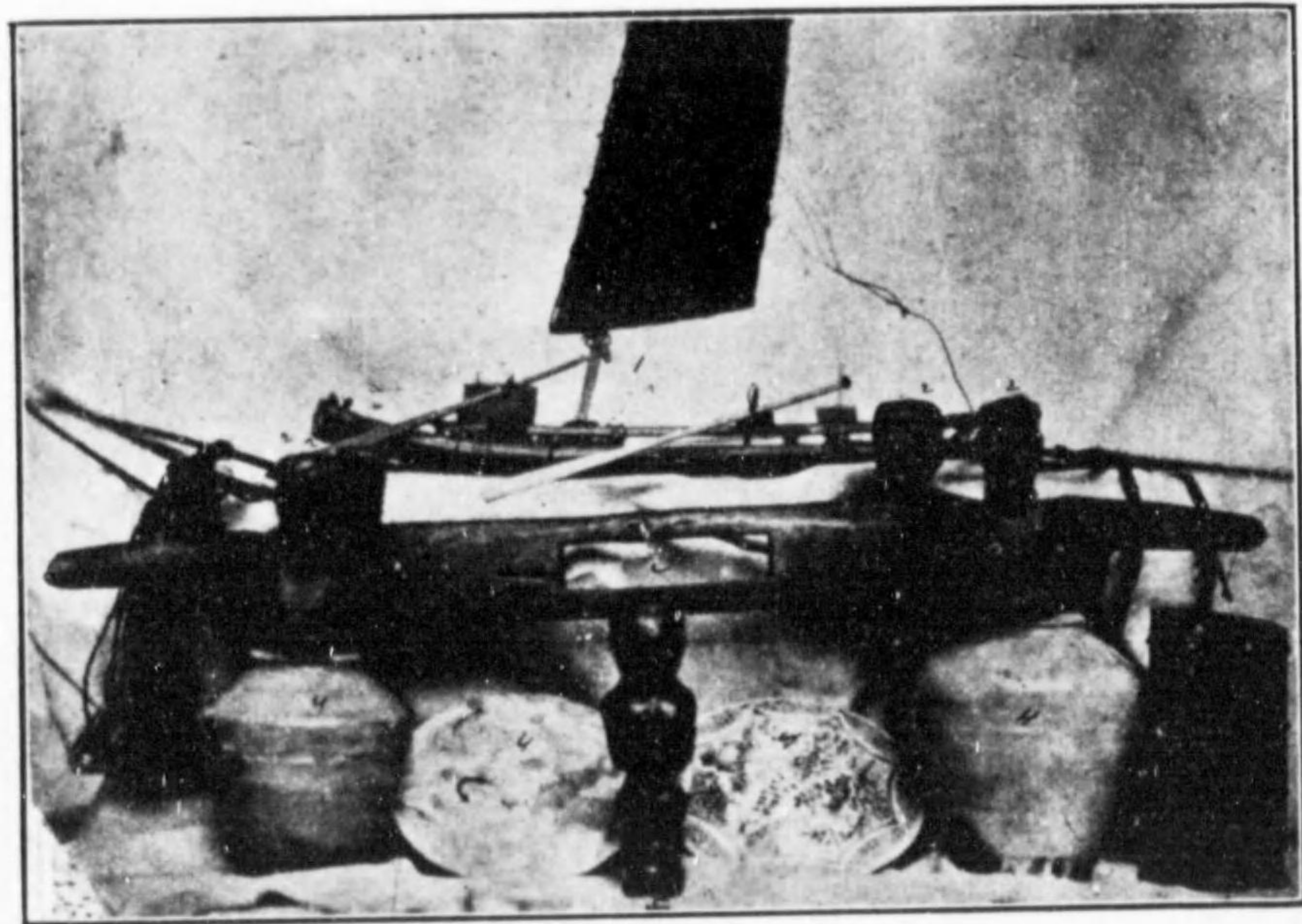


婦 夫 長 酋 蕃 生

四酒瓶

五木偶

六竹盃

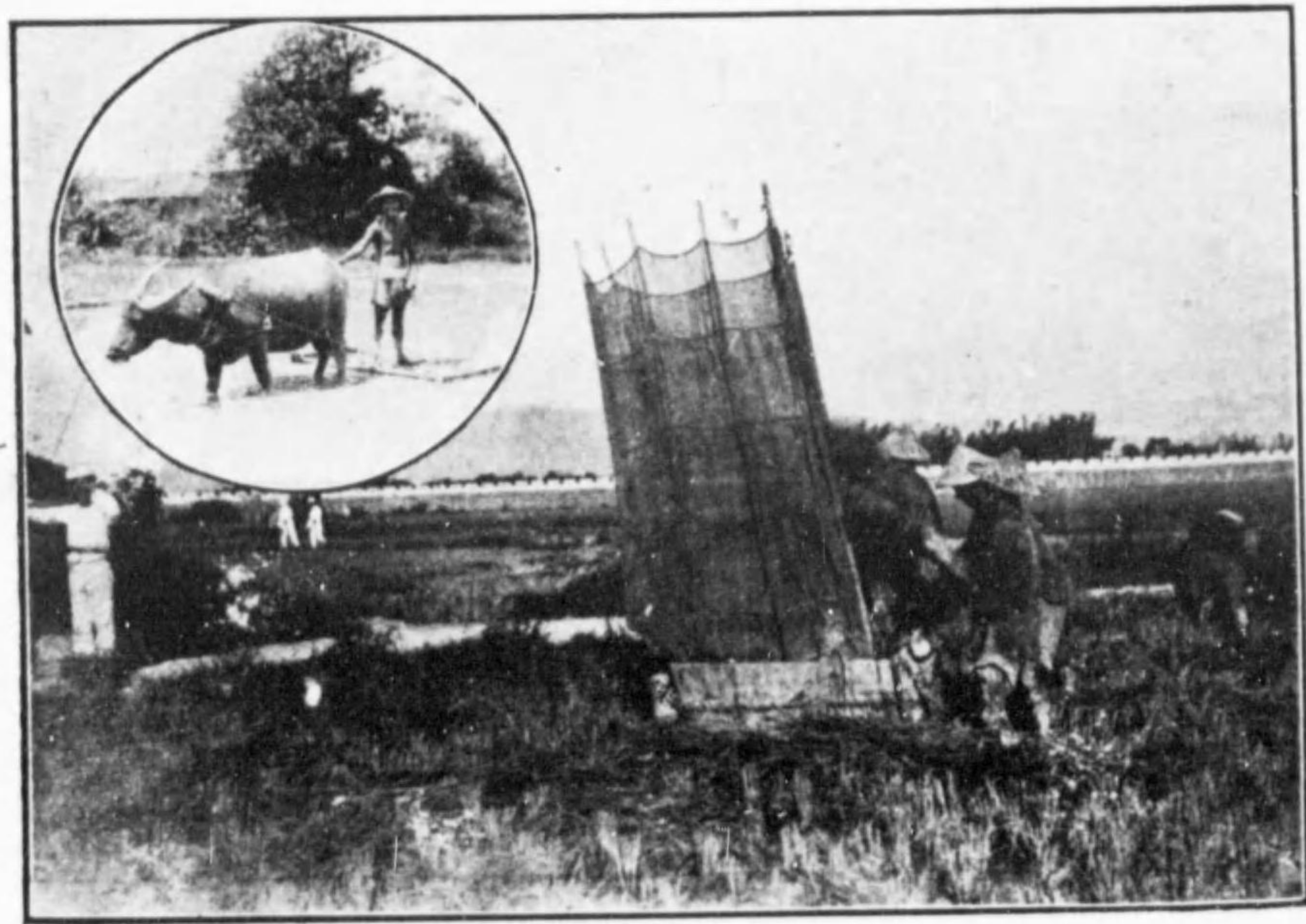


生 蓄 器 具

一 竹 船 雛 形

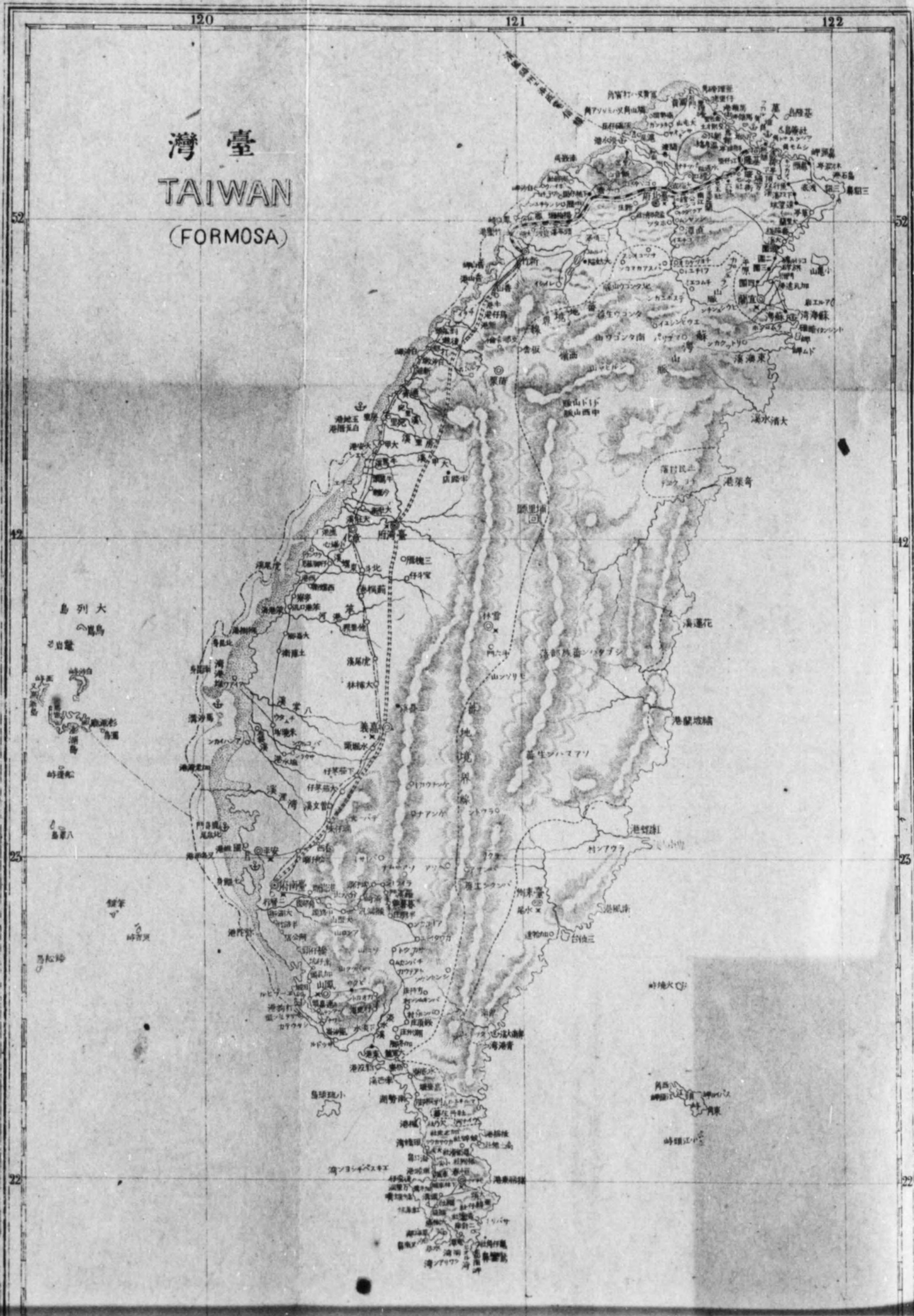
二 煙 管

三 木 盃



農 業 之 圖

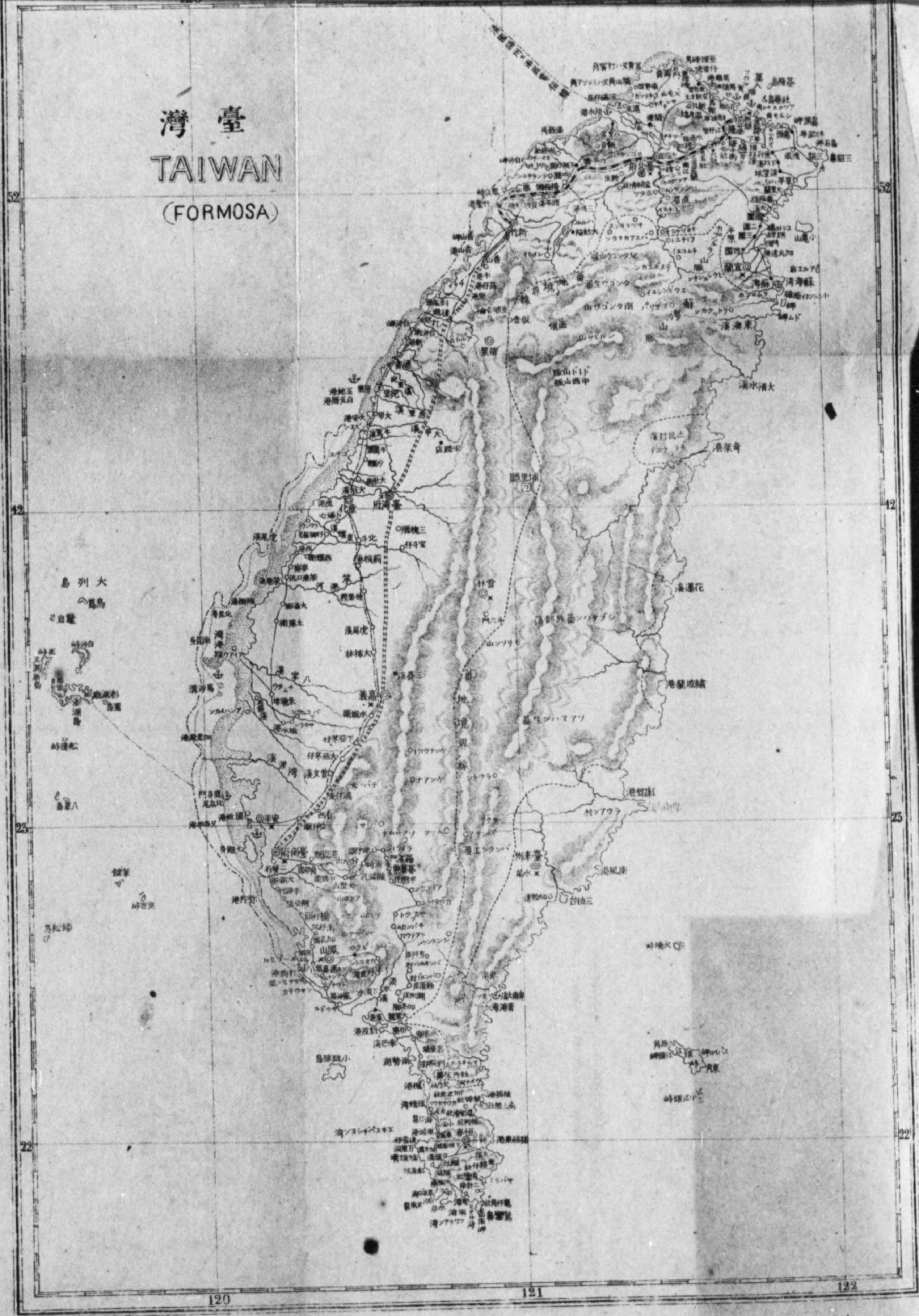
臺灣
TAIWAN
(FORMOSA)



大島列島
澎湖群島
金門
馬祖

澎湖群島
金門
馬祖

臺灣
TAIWAN
(FORMOSA)



52
42
25
22

52
42
25
22

臺灣 鳴

土居通豫演說
荒浪市平速記



臺灣の交通の最も著しく顯はれて來たのは元の末であり、
 元末の澎湖に巡檢司と云ふものを置きました。嘉靖年中
 には、澎湖の交通に退いて安平に據つたが、一番初めであり
 日本が澎湖から退いて安平に據つた時分に澎湖へ根拠
 を構へて爾して日本人が元々の取締の弛んだ時分に澎湖
 を構へて爾して日本人が元々の取締の弛んだ時分に澎湖へ
 居られずして安平の方へ退いて根拠を構へた。

ヒリツピン諸嶋より今の福建廣東あたりを侵して居つて其末
 に此處へ根據を築いたもので遂に和蘭人と日本人とで臺灣の
 一部分を共有して居つた有様でありました。此の時日本人は鷓
 籠の方を焚き討ちして領分を擴げました。一體此の臺灣といふ
 のは昔は毘舍那と申しました。漢書に據りますると太寛國と
 名けてありました。所で此の和蘭人が臺灣を取つてから初めて
 臺灣の名が定まつたのであり申す。是は其築いた臺の下に
 灣があるから付けた名だと申す。臺灣の字を用いたものではな
 が通じます。から旁支那の方で臺灣の字を用いたものではな
 い。かとも思ひます。併し臺灣の名は和蘭人が命たといふことは
 支那の書物に書いてあります。其前に葡萄牙人が参つて其土地の
 美麗なを見て「ホルモサ」と稱へたさうで御坐ります。今にも外
 國は信に美しいといふ意味じやさうでござりまして。今にも外

ものと見ゆます。夫で日本人と云ふ者はどう云ふ人であるかと
 尋ねて見ます。是は未だ充分に調は出来ませぬ。が或る書物
 に佐賀俊平と云ふ人が七人の勇者を率ゐて臺灣へ據つたと云
 ふ事があります。此時代等を能く取調べて見て果して嘉靖年中
 に據つたものであつたならば即ち佐賀と云ふ人である。と云ふ
 事が分ります。是は後日の取調に譲つて置きます。夫から明の
 萬曆の末に至りまして和蘭人が参りまして日本人に相談をし
 てさうぞ鹿の皮の大き位の地は我等に與へて貰いたいと申し
 ました。から日本人が夫を承諾致した所が和蘭人は狡猾にも其
 鹿の皮を糸筋の如く小さく切つて夫を大きく廣げて其周圍丈
 けの地を貰つたものであると申して遂に其處へ城を築きまし
 た。是が即ち今残つて居ます所の安平の和蘭城であります。此
 の和蘭人も先づ海賊を見た様さものであつたと見ゆて頸りに

人は快く承諾して早速立ち退きまして鄭成功は臺灣へ根拠を
 拵へ兵備を整へ益々清國の内地に攻入つて明の朝廷を恢復す
 ると云ふ威氣込でありました、其時に今の安平港に鎮臺を置
 て安平鎮といふものにした、夫から臺灣の名稱は改めて東都と
 し、ました所が惜い哉鄭成功は其志を充分に成就する能はずし
 て僅か三十九歳で病死致しました、成功は中々磊ら、作戦計畫
 は皆か自分の方寸より出しました、部下にも數々豪傑が居まし
 たが成功の智謀に及ぶものなかつたさうでして成功は夜分
 一定の處に居らす居室といふ様な處へ家内のものが食物を置
 ておくと成功は處々運動して諸事を考案して腹がへると其處
 へ来て喰べて又何處かへ出て考へて居たさうです、其子の經と
 云ふ人が後を襲つて東都の名を改めて東寧と致しました、是も矢
 張り臺南に據つて居りましたが其孫の克塽と云ふ人に至つて

人は皆な「ホルモサ」と稱へます、其後天啓年中に至りまして彼
 芝龍即ち鄭成功の父が此臺南に根拠を拵へました、鄭芝龍は明
 の正朔を奉じて清朝に抗敵して居りました、復た和蘭人が其跡を取つ
 中に至つて降参を致しました、夫故に復た和蘭人が其跡を取つ
 て全く臺灣近傍を占有する事になり、鄭芝龍が日本の平戸へ來て居
 國姓爺といふのは御承知の通り鄭芝龍が日本の平戸へ來て居
 つて田川氏と云ふ人の娘を妻にして夫に生れたのであつて此
 鄭成功は幼名福松と申しました、成長した所が所謂日本魂を受
 けて中々の豪傑で親父の鄭芝龍が清國へ降参したのは大に不
 同意であつて更に福州邊で旗を樹てあか／＼盛んに清國に抗
 しまして南京近くまで攻寄せました、居た頃分であるから貸
 に和蘭人に相談して臺灣は父の取つて居た領分であるから和蘭
 財を悉皆やるによつて立退いて呉れろと申しました處が和蘭

遂に清國に降参をせしめた、清の康熙二十三年に至りまして遂に福建省に隸屬して臺灣縣を置きました、是から清國が段々と總ての政治を取扱ふ事になり、近來劉銘傳が巡撫となりましてから特別の政治を施さなければいけないと申立て臺灣を一省としたと云ふ事であり、其處で之を總て括つて申しますならば先づ日本人が開き始めさうして和蘭人が之を中繼して鄭成功が其跡を擴張し清國が幾何か之を整理したと斯う云ふ有様であり、其日本人が最初交通を開き日本人の種、鄭成功が根據としたといふ臺灣が今日に至つて日本の新版圖になつたと云ふのは實に奇妙な事であつて、我々日本國民は大に此の臺灣に注意をして愈々臺灣の諸事を擴張整理しなればならない時機に達したといふものは國家の爲め實に賀すべき事と思ひます、又不審議な縁と思ひます

海路 仲港 臺灣

そこで海路の有様はどういふ風になつて居るか、と申し、昔は福州の方から澎湖を経て鹿耳門と云ふ所へ通じて居つた有様であり、又澎湖を経て安平の方へも通じて居つた、安平から厦門の方へも通じて居り、また、福州の方から鷓籠の方へも通じて居りました、又、曾て鄭成功が臺灣へよる時、先づ澎湖島に據り、又、前さき、佛軍が臺灣を攻めた時にも、又、我軍が昨年三月に澎湖に據つて、夫を根據とした事である、此の臺灣に交通する中、一着に據つたも、此澎湖である、故に此の臺灣に交通する中、所は澎湖と云はなければならぬ

從龍至福州 凡百五十哩 從龍至香港 凡四百哩 從龍至厦門 凡二百三十六哩
從淡水至福州 凡百三十八哩 從淡水至厦門 凡二百〇四哩 從淡水至香港 凡三百八十二哩

從安平至廈門 凡百六十二哩
 從安平至香港 凡三百哩
 從安平至上海 凡五百七十九哩
 從打狗至福州 凡百九十二哩
 從打狗至廈門 凡百七十九哩
 從打狗至香港 凡三百二十哩
 從澎湖至福州 凡百四十五哩
 從澎湖至香港 凡二百七十五哩

是は古來清國の臺灣に交通する海路の概略でありまして此の臺灣の港はどいういふ所が宜いかと申すと先づ鷓籠港が第一であります、唯今の所では北風の激し時は船の碇繫には随分困難であります尤も内の灣の方を浚深しませれば三十尋位は深くあるさうで御坐りますから工事を施せば良港となります、其次は南の方の打狗といふ港灣であります、入口には「エーファヒル」と「サフセン」角と申す山を以て港口を擁して居ります、是れも工事を施しますれば随分よき港灣となりませう、其次は東岸の方の蘇澳港である此の港は二つの灣より成り立てあつて北風を北風灣と稱へ南を南風灣と稱へます北東の風の時は小船を

も此處に入れば風を避るゝことが出来、夫から昔交通の初りであつた安平港は今日は港灣としては誠にいけあいな船は一里以上の沖に投錨し「ジャンク」(船の名)等にて陸に往復する有様であります、次に手に申します、彼地の船は「ジャンク」の他に舩甲と申して小さな船が有ります、又「テッククワイ」と申して竹船が有ります、此の竹船は竹で以て筏の様に尤も船形に組んで竹の櫓に竹で編だ帆が掛てあるさうして中に桶が結つけてあつて人間は此桶の中へ三人斗りも這入る是で激浪怒濤を凌いで覆らない、又臺北から六里ばかり参つた所の淡水港と申すも是も河裙であつて入口に「パイ」即ち上に見ぬ沙汀があつて港灣としては價のない處であります、船の碇船の最も便なのは澎湖の馬公港であります、此の港は風を避るに最も宜しき處であります、然れども港の周圍を擁する丘陵の低き故に少しく風の激しき時

は小船は往來に困難するよしに聞かす併し昔清國と交通の有様を見ますると必ず此の馬公港を中繼所にして居る様の有様でありました安平から出る船であつても打狗から出る船であつても皆天氣をよく見定めて置いて先づ馬公港まで航海をして夫から又天氣を見定めて彼處から福州の尖石山の方へ参つたものと見えます然るに臺灣海濱は諸君御承知の通り黒潮の激しき處であつてそこく海より流るものは臺灣の東の北面を通つて居りますモウ一つの地薩迦の黒潮は臺灣の東に突當つて而して比律賓諸嶋の方へ流れて居ります是が又季節によれば引繰返つて東北に流れます故に臺灣の周圍南方を除くの外は黒潮の激流で包まれて居ると申しても宜しい程の有様であるさうして颶風の甚しい處であつて呂宋近傍即ちハツシヤ地狭から起る處の颶風は臺灣海峡を通過して支那の大

陸の方へ突當つて東北の方へ向つて日本へ及ぶものあります此の風は重に舊暦の六月七月頃に多くあります又臺灣の東方から起つて日本の南方を突く颶風もありますさう云ふ工合でありますから航海の困難は實に甚しいものであつて餘程期節を能く見て航海しなれば意外の難に遭ふ事があります夫昔の臺灣へ航海する人が西岸の方の風の工合を調べて居るものを見まするに最も甚しい時分は舊暦の正月二月三月であつて此時は非常に航海を警めた有様であります夫から四月五月頃に至つて風が弛みます此の時分の航海は最も穩であると申して居ります夫から六月七月頃に颶風が俄かに起つて來る事があります六月の風は雷の鳴ると止まるし七月の風は雷が鳴ると餘程激しくなる古老が申して居ります八月頃は北風であつて是は支那人が臺灣から福州の方へ参るには最も便風

と申して居りますが八月九月頃の風はなか／＼激しい風であつて是は数日續く事があります此風には大抵雨を挟んで居つて白い浪が立つと船を出すことが出来ないと申して居ります此浪を白馬と申します十月頃に至ると天氣が晴れたならば風は穏であつて最も航海に便なと申すことでありませす十一月あつて余程危ないと申して航海者は昔しから戒心して居るさうでありませす此の風の都合又航海の都合は即ち臺灣の西岸の方の事と申したものでありませす私が私に參る時は丁度舊曆の二百十日の近い頃でありませす隨分海が荒れませして既に神戶から出ませして其翌日は豫州の三机といふ所で風待ちして一晝夜淀船しましたさうして鶏籠の方へ近寄るに隨つて中々激浪怒濤でありませしたのが幸にして鶏籠港へ這入りませした時は静

でありませした是が即ち舊曆七月の事で甚だ宜しくない時でありませす歸航の時は丁度十二月即ち舊曆十月でありませして天氣が宜しかつたから大變海上が静かでありませした併しながら鶏籠を出ませして四十哩位の所は如何に静かな時であつても彼黒潮が流れて居りますから非常に波立つて船が動揺します斯う云ふ次第でありませすから此臺灣近傍の航路は余程困難の趣で私の歸ります時に海城丸に乗りませしたのが其船長の話には鶏籠から澎湖嶋を経て安平打狗の方へ三遍航海をしたが潮流の工合が何時も違つて居つてどうも未だ能く工合が分らないで甚だ危険であると申しました此の如く潮流の激しい所でありませすから日本から航海をするのにはどうしても三千噸内外の船であくははいけないし又鶏籠から澎湖嶋安平打狗廈門香

處があるから不便であります。是は先づ千噸内外の船が適當であらうかと思ひます。夫で航海をなす人は充分に此潮流の工合や風の工合や港灣内外の暗礁等を能く研究して而して船を遣る様にしなければ非常に損害を招く事があるだらうと思ひます。故にあの近海の測量等は實に今日の急務であると思ひます。へます。

目今臺灣より航路の有様を申せば内地より基隆に往復するとは固より淡水港より船が出て福州、厦門、汕頭、香港等へ定期航海をなすと云ふ様な事にあつて居ります。此船は英人も支那人も獨逸人も持つて居ります。此中英人の會社トクス商會と云ふが最も盛にやつて居ります。此の社は香港に本社がありまして淡水は支店であります。其線路は淡水より安平、打狗、厦門、汕頭、香港間でありまして一港から毎月四五回發船致しませす。殊に

茶の輸出時即ち四五月頃には厦門又福州の間は往復を増加致します。淡水より其各港に至る乗客の賃金及び海里の概略を申せば左の如し。

淡水厦門間 二十弗 往復三十弗 海哩二百〇三哩
 下等通常四弗 茶時季二弗

淡水香港間 五十弗

厦門香港間 二十五弗 海哩二百七十哩

厦門スツウ間 十二弗 海哩百二十哩

厦門福州間 二十五弗 海哩百八十哩

又南の方安平、打狗より厦門、香港間の航海は其期一定は致しませぬが先づ毎月三四回と申す有様では各地に居留する外國商人の私有若くは雇入れたるものでありまして先づ著しきものを擧げますればトクス會社の代理店「ベーン」及び「ジャート」ウ

百九十哩、臺南から恒春まで凡そ九十哩あります。此道路と申すのは臺北城の近傍とか臺南城の近傍とか云ふ所は随分路らし
 い所もあります。其外は大抵陸道の如き場所であつて、加ふ
 るに川が澤山あります。最も川の多い所が宛里と云ふ處から大
 甲の先の牛馬頭までの間であつて或る人が大小數へたので八
 十幾つもあると云ふ事でありました。其中の最も大きなのが大
 甲溪であつて凡ての川の工合と云ふものが流れ次第に流れて
 堤防も無い事であります。雨が降れば氾濫し晴天になれ
 ば忽ちに昨日の淵は今日の瀬となつて居る様亦有様で通行人
 は非常に困難をして居ります。尤も此頃に至りましては或は舟
 渡しの出来た處もあり、假橋の出来た所もあり、又渡しも渡されな
 何分雨が降るならば假橋も流れて仕舞ふし又渡しも渡されな
 い處が出来て甚だ困難の有様であります。夫から又有名な所へ

通ずる場所は鶏籠から東の方、宜蘭と云ふ所の通路は五十五哩
 程もあり、此間は矢張り路の無い所であつて、岩の上をつた
 つたり草の中を分けて行く様な有様である。夫から有名なる淡
 水港といふのは是れ即ち支那人は尾と申して居ります。併し
 今日の日所では随分肝要な所とあつて居ります。淡水河と云ふ
 は先刻も申す通り餘り長い所でないです。此淡水河と云ふを湖
 りまして八哩ばかり参ります。と即ち大稻埕といふ所へ参り
 ます。夫から又僅かにして艋舺と云ふ所へ着く艋舺は即ち臺北
 城の西門を出て十町斗り往つた所である。是れは今日では川蒸氣
 が通つて居ります。片道二時間もかれば自由に行かれます。
 夫から臺南へ行く路もあり、又彰化から西の方鹿港へ参つて
 南方埔里社へ行く路もあり、又彰化から西の方鹿港へ参つて
 南方埔里社へ行く路もあり、又彰化から西の方鹿港へ参つて

南の方の臺東と云ふ處へ通ずる路もあるさうです、是も兎道といふ様のもので路と云ふ路は無い様です、其最も大道と申すべく臺北より臺南に通ずる本街道と雖もなかく車を牽いて行くやうな事は出来なない、場所によつては田やら路やら分らない所が多いさうです

都會

さうして都會といふものはどう云ふ有様であるかと申せば淡水、新竹、鶯籠、宜蘭是が即ち臺北府で管轄して居る縣であります、夫から臺灣、彰化、雲林、苗栗、埔里社是が即ち臺灣府で管轄して居る縣であります、尤も其中埔里社は縣と稱へず廳と稱へて居つた様子であります、夫から安平、寶山、嘉義、澎湖、恒春是が即ち臺南府で管轄して居つた縣であります、其中澎湖は縣と稱へず廳と稱へて居つたさうです、さういふ風になつて居りますから

右に述べた府とか縣とか廳とか云ふものは先づ繁華の都會と申して宜しい、併しながら府の中でも臺北府は劉銘傳の創立した城で此明治二十年頃に出來上つた様子であつて千メートル四面の城であります、其中建物は先づ三分の一少し餘る位建ててある有様で尤も諸官衙は皆其城の中にあります、其城の中の町家と云ふものは概略の調べで八九百位のものであらうと思ひます、夫から其城の北門を過ぎて僅か五六町も行きますと町がありまするが夫は先刻申した大稻埕であります、其大稻埕と云ふ所には今日の所では戸數が千餘りもあらうと思ひます、るがそこには外國人の居留地もありまして又支那人の大茶商、樟腦商といふ様な者は皆そこに住つて居ります、其町は彼猛艸と較べますると新たに開けた有様であつて臺北の最も古い町は即ち先きに申した猛艸である様です、猛艸は戸數が或調

べに據りますると僅かなものでありまするが私共が實地參つ
 て見渡す所に據れば殆んど三千餘りもあらうかと思ひます尤
 も此處は支那人や土人の居る所であつて實に市街は不潔極ま
 るであります夫から臺灣府と申すのは圖面上で見ますと臺北
 と同じく立派な所であるがと申しますると今日はさうでない、
 是は劉銘傳が計畫をして茲に府を開くといふ事になつて居つ
 て未だ業を終へて居ない様である先づ此處の都會といふべき
 所は即ち彰化である臺灣府には僅かの人家しか無い而して此
 彰化よりも港際の鹿港といふ所が繁華であります此頃日本へ
 參つた辜顯榮と云ふ人は鹿港の資産家で元は厦門あたりの人
 の様でありますが今日は鹿港に居る此處は隨分商賣の盛んな
 所であるさうです夫から臺南は先刻も申す通り先づ是が臺灣
 開き初めの所でありまするから城も臺北城よりは少し大きく

山水

構造もナカ／＼能く町もナカ／＼古びて居るさうです三都府
 が右の如くでありますから縣や廳は夫の小さいものと御考
 へ下されば宜しい、而して東南の方に參りまするならば臺東と
 申す處があります此は支那の屯田兵が一營計りあるさうです
 さて又山の中は内山と稱へまして生蕃の居る所でありませ
 處の通路は例へば埔里社とか雲林とかでありませすれ共内部
 はどう云ふ様になつて居るか未だ之を審かに探検した人があ
 りませぬから能く分りませぬ併し人員はどうかと云ふと七八
 萬人あると申しますすけれども是も確かり分りませぬ
 一體臺灣の地は山水は實に奇抜であつて諸君の腦裡に早く分
 る様に云へば丸で明畫の山水を見る様であります彼鷄籠の港
 若くは打狗の港灣の景色は固より其他山の景色と云ふものは



臺灣舊時線路圖

實に畫に描いた様である、大雅堂が得意に揮つた水墨の山水の
 様である故に基隆を出帆して宇品へ着いて俄に内地の山水を
 見ると住吉派の畫を見る様であります夫は前の寫真に依つて
 御覽下されたい

電信

電信の事はどうして居るかと思し申すと臺北局が管轄局に
 なつて夫から淡水、雞籠、新竹、彰化、嘉義、臺南、安平、打狗、澎湖、
 ふ云ふ風にあつて居ります、此線路の有様を圖で示しますると
 即ち此の通りにあつて居ります
 臺北局は即ち管理局であるから局長は陸軍の武庫を司り又税
 關の事務等を兼ねて其上に電信局長を兼ねて居つた様であり
 ます、是は月俸百五十兩で外に食料が三兩、次長が一人是が月俸
 百兩で食料は同じ事、夫から通信の技術長が一人居つて是が月

俸五十兩、皆食料がありまするが食料は三兩で高下なしに一樣にしてある、夫から通信一等技手が二人、是が月俸二十五兩、二等技手が三人、是が月俸二十兩、三等技手が二人、是が月俸十二兩、製器手が二人、月俸各二十五兩、夫から會計長、會計員、庶務員各々一人置いてあつた様子である、此月俸といふものは分らない、是は皆現俸給の外に月俸の三割増俸を與へてあつた、又外國人が一人、是が月俸三百弗、電信の工夫長が一人、是が月俸二十五弗、夫に工夫が五人居つた、是が各々二十弗、電信の配達人が四人、此月俸は能く分らない、夫から給仕が二人置いてある、是が月俸各々八弗でありませ、次に淡水局は通信技手が二人、電信の配達人が二人、新行も鶏籠も彰化も各々通信技手が二人、電信の配達人が二人、鐵も新竹も各々二人であつて新竹には別に電信工夫の看手と云ふ者が一人置いてあつた、彰化の方は電信配達人が一人、嘉義

は電信技手が一人、電報配達人が一人、臺南局は是は都會でもあり且安平の方へ岐れて澎湖島の方へ海底線があつたから通信技手長といふ者が一人置いてあり通信技手が四人、庶務係が一人、電信工夫が一人、庶務係が一人、電信の配達人が一人、打狗局が通信技手が二人、電信の配達人が一人、澎湖島の通信技手が二人、電信工夫が一人、配達人が一人、先づ斯ふ云ふ風に置いてあつた有様である、此通信技手の勤務時間と云ふものはどう云ふ風であるかと申すと午前八時から午後三時まで、夫から交代して午後十一時までは午前八時と午後十一時、通信の機械といふものはどうしてあ

るかといふと陸線であつても海底線であつても皆「シーモンモ
 ールス、シーモン、ハルス」電池は「ログランシェー」が用ゐてあり
 ます、夫で線路の掛け方は圖面にも示してある通り陸線は鶏籠
 から臺北を経て打狗まで二線であつて鶏籠と臺北の間は鐵道
 用の電線も添架してある電柱は直径五寸内外の杉の丸太で長
 さが四間内外のもので用ゐてある所が日本の様に腕木を用ゐ
 て無く「ブラケット」を直ぐ柱に打ち付けてある、さうして電柱
 には丹礬を注入した物は一つも無い、尤も柱の元には「コール
 ール」を塗り附けるといふ事である、又碍子は日本製の物よりは
 餘程上等であるといふ事です、さうして此臺灣あたりで用ゐて
 居る電柱といふ物は決して臺灣では出来ない支那の方から廻
 つて来る夫で是から先き電柱を求めぬのに實際餘程困難であ
 ると思つて居ります、

從來電報を發したり受けたりして居る者はどんな人がやつて
 居るかと思つて居る、其外支那人も使用します、支那人は漢語の電報
 を用ゐる西洋人は皆英語の電報を用ゐて居ります、是から先々は
 電報を延長して恒春を経て南の方變鼻まで行かなくてはあ
 らぬ、此變鼻と云ふ所には必ず測候所を置いて前に申した所
 の近傍海峽から起る颶風を豫防するならば日本内地に取りて
 は非常の利益であらうと思ひます、夫から又尤も必要なのは東
 の方鶏籠から宜蘭を経て蘇澳港の方へ延長して此にも矢張り
 測候所を置いて東岸に起る所の氣象の報告が必要と思ひます、
 畜に氣象の報告のみならず軍事上と云ひ民政上と云ひ總て斯
 くまでに延長しなれば其實効を顯はす事は出来ないだらう

と思ひます扱て又淡水から尖石山へ參つて居ります海底線は
 どう云ふ有様かと申しますと此海底線は圖面に示してある
 通り總て百七十哩あります、是は西曆一千八百八十七年十月の
 沈敷でありまして私共參りましてから時々切れて仕方が無い、
 段々取調べて見ると新曆十月頃になりますと尖石山の沖二十
 哩若くは三十哩位の所で牡蠣を採つたり又は其季節には非常
 に太刀魚が採れるさうです、夫で釣の様なもの引掛けて海底
 線を損するだらうと云ふ事でありませす、或人の説には此海底線
 は尖石山の方から三十哩計りの間淺海線を用ゐたならば必ず
 此思は去るであらうと申して居ます、尤も淡水の方は今日と雖
 も六哩位淺海線を用ゐてあります、又安平から澎湖へ掛つて
 居ります所の海底線も西曆一千八百八十七年十月に沈布なり
 まして總て五十五哩あります、此海底線も同じく十二三哩位な

所に「ポリナ」即ち珊瑚蟲が澤山ある、之が爲に線をいためて時々
 切れる事がある、是は餘程能く注意せねばならぬ場所でありま
 す、又困難なのは例へば打狗から恒春へ行く間の海濱に架設せ
 ねばならぬ所の線でありませす、此は餘程注意を要します、何故
 なれば風波の荒い所でありませす、潮を合んだ雨が降る夫故
 に腐り易い、是は困難な事でありませす、又鷄籠から臺北へ行く間
 には多く白蟻が居つて電信柱に喰ひ込んでいたります、或人は
 之を鐵の柱にでもしければあるまいと申して居ります、さて
 又電報料金はいかにと申しませす、我國の舊時の電報料金の如
 く一局毎に其料金額を異にしてをりませす、即ち七語を以て一音
 信とし七語以上は一語を加ふる毎に相當料金を課します、歐米
 人は多く英語電報であります、支那人は總て漢語電報でありま
 す、電報料金表を此に掲げます、

郵便の有様は従来と云ふ様になつて居るかと思ふと申すところ、
 面白い、實際古くから手は着けてある、餘程前即ち清の嘉慶十二
 年頃の制度は四つ一等郵便局の如きものを置いてあります、第
 一は府前舖是の受持線路は南は南路舖に至るまで清里十五里
 北は北路舖に至る迄同二十里第二は南路舖で北の方府前舖に
 至る迄同十五里南鳳山縣界二費行溪舖に至る迄同二十里第三

郵便

凡洋文每字之價即上開洋字數目
 (一角は日本拾錢一點は同壹錢即ち臺北より滬尾へ漢語電
 報一聯價六錢歐文は壹語拾錢なり)

	澎湖
臺北	24
滬尾	24
基隆	24
新竹	24
彰化	22
嘉義	22
臺南	20
安平	20
旗後	20
澎湖	
	澎湖

凡華文每字之價即下開華字數目

旗後	安平	臺南	嘉義	彰化	新竹	基隆	滬尾	臺北	臺北
24	24	24	22	20	16	10	10		臺北
24	24	24	22	20	16	14		點五	滬尾
24	24	24	22	20	16		點七	點五	基隆
22	22	22	20	16		點八	點八	點八	新竹
20	20	20	16		點八	角一	角一	角一	彰化
14	14	14		點七	角一	角一	角一	角一	嘉義
10	16		點七	角一	角一	二角	二角	二角	臺南
14		點三	點七	角一	角一	二角	二角	二角	安平
	點七	點五	點七	角一	角一	二角	二角	二角	旗後
角一	角一	角一	角一	角一	二角	二角	二角	二角	澎湖
後旗	平安	南臺	義嘉	化彰	竹新	隆基	尾滬	北臺	

い夫で先づ規則を發布する事も止めて遂に郵便切手を漸車の
 切符に代用して其切手を所持するものは漸車に乗る事を許し
 て漸く夫を消費して仕舞つたと云ふ事でありませす私其切手
 はど云ふ物であつたかと思つて頼りに捜索して見せましたけ
 れ共今日ではどうも申す其後に復た劉銘傳の考でありませ
 郵便切手を印花と申します其後に復た劉銘傳の考でありませ
 たか郵政局と云ふものを置いて専ら官の郵便物を諸所へ運送
 して居りましたが是は人民が一向使用する事は出来なかつた
 此郵政局の時分規則等を見たいと思つて是も探して見まし
 たがどうも何を見出す事は出来なかつた夫で今日はどう云
 ふ風にしてみても何を見出す事は出来なかつた夫で今日はどう
 北の城内に北門街と云ふ所がありませすそこには通常の商賣人
 の店で左の如きの看板を掛けて居つて一つの帳場を設けて租

が北路舗で南府前舗に至る迄二十里北新港舗に至る迄二十
 里第四が新港舗で南は北路舗に至る迄二十里北新港舗に至る迄二十
 溜灣港舗と云ふに至る迄二十里と斯う云ふ風にしてあります、
 此舗といふは矢張り驛場であつて東西の連絡を通ずる様にな
 つてありませす私用の通常信書の賃金は路の遠近により臨時に
 定めて發送するとのことでありませす又公用緊急の信書は支那
 の例に倣ひ火票なる者を用ひ傳騎を以て各驛を経て遞送しま
 す之を五百里加急と稱へませす又私用緊急の信書は特に健壯な
 るものを備ふて送達致しませす之を専差と申しませす劉銘傳が臺
 灣の順撫となつた時に昔の驛傳法を改めて今日我邦で用ゐる
 様ち郵便法を設ける積りで其規則までも拵へて郵便切手は英
 國へ注文して夫が最早到着し既に發令すると云ふ場合になつ
 て段々試みた所がナカク郵便切手を使用する様ち人間は無

雑な帳簿を備へて側の壁に狀差が拵へてあつてそこへ持つて
來る手紙を差込んである、

浙 福州 厦門 汕頭 香港
乾昌仁記輪船信局
寧 京都 天津 上海 長江

巾一尺二三寸縦五尺許り黒
漆ニテ塗り金字ヲ刻ス

其郵便物と云ふものはどう云ふ所へ行く物であるかと申すと
主にも向ふの福州、泉州、漳州等へ宛てた物が多い、臺灣の内
行く物は一切見へない、察するに臺灣の中の事は取扱はずして
即ち支那の方へ行物丈けを船便に依つて取扱ふものと見へま
す、其船便は何處へ頼むかと云ふと彼の淡水から出る英國洋行
の海龍輪船に托してさうして福州、泉州、漳州の方へ送る土地の
人は此の福州、泉州、漳州を總稱して單に唐山と申します、此の乾
昌仁なる者は上海人と申すことでありすが私共が參つた時

分には廢業致して看板を撤去しました、モウ一つ大稻埕の碼祖
宮前街といふ所に私設の信局がありす、夫は周炳記信局と申
しまして是も矢張り唐山への通信を取扱つて居ります、是れは
猛艸臺北城内等に取次所を置いて居りまして此臺北近邊から
唐山へ參る信書は皆此局で扱つて居る有様であります、此周炳
といふ人は元と泉州の者であつて主人は泉州に歸つて居て其
息子が代理して事務を取扱つて居ります、是も固より切手と云
ふ様なものゝある事は見當りませぬ、矢張り英國の船に頼んで
唐山の方へ送つてやる、其船着きは何處かと云ふと厦門、香港、汕
頭といふ所でありす、此取扱の仕方といふものは如何にして
居るかと思ふ申すと其船の出る時刻といふものが定まると其事を
聞いて各商家は必要があれば書狀を認めて局へ持つて來る、夫
を局で受取つて船長に渡す毎便大抵發送通數が百五十通以上

三百通以内と申します送達手数料として毎回船長に一弗乃至一弗半を拂うそうです、さうして夫が厦門なり香港ありへ着くとそこに又信書を取扱ふ局があつて之れを受取つて夫れ配達する向ふから來る信書も亦同じ方法です、さうして其信書の手数料といふものは之を名けて酒資と申します、其酒資が厦門までが一通三十文、二文は日本の一厘に當る、汕頭までが一通四十文、香港までが一通五十文で路の遠近に依つて價が極めてあつて其信書の重量の多少に依つては少しも極りを附けて無、夫から手数料即ち酒資の定め方には種々ある、一つは手紙を持つて行つたと同時に所謂相當の酒資を拂ふのと一つは通帳に時々酒資を記入して置いて年末に至つて精算をしますので、夫で前者の信書には現金を領収した證據として酒資理明といふ判を捺します後者は其局に信資簿と云ふものが備へてあつ

て信書を頼んで來た商賣人の名前と酒資の額を記入してあります、又一つの法は先拂税といふ様なもので是は發信人が酒資を拂はず向ふの配達した所で受信人より取るのです、又其内發信人が幾分の酒資を拂ふて残り幾分を受信人が受取る時拂ふ法もあるそうです、此等の法は支那内地には専ら行はれて居ると承ります、夫から日附印といふものはありませぬ、周知信局といふ印がありす、是はどういふ者に捺すかと申すと周知信局を經過したといふ印しに捺す様です、是は能く調べて見ると總ての手紙に其を捺すかと申すとさうで無い、厦門へ行くと信書に限つて捺す事になつて居るさうします、其處へ行くものと門にも周知信局といふがあつてそこで引受けて配達すると、いふ譯で其協同して居る信局であるから其處へ行くものに限つて斯う云ふ取扱ひをするものと見ゆます、外に護封といふ印

居りまして此の農業を営みて居る者は年の寄つたものには字を知つて居る者が極く少い、併ながら三十以下の者は相應に字を知らず、た者があつて、紙を出す事は甚だ稀れでございませ、普通の家でなければ必要の用事がなければ手紙の往復と云ふ事は一向にない有様である、然るに臺北と臺南と地方に茶の輸出が盛んで随分立派な商賣人が居る、殊に臺北の地方に茶の輸出が盛んであり、すから四五月の製茶の最も盛んな時分になり、す、厦門から商賣人が淡水を経て澤山に入り込んで来て、手紙の往復が十カ、頭繁であり、す、夫から外國人の郵便は如何に取扱ひ居るか、と申し、す、其香港始め歐洲に送る信書は皆英國郵便切手を貼付して、英國領事館に托し、す、英國領事の設けなき、揚所は英國郵便切手を貼付して、英國領事館に托し、す、英國領事の設け

がありません、是は信書の封緘を嚴密にして、日本に送る時は日本に送るが、無いと云ふものは、捺す印で、是が日本の書留のやうなもので、あり、す、夫から又、銀信と云ふものが、あり、す、此の仕方は、手紙と一、緒に、封入郵便を見、た、様、な、宛、名、を、書、い、て、少、し、も、違、は、な、い、併、し、幣、封、入、郵便、を、見、た、様、な、宛、名、を、書、い、て、少、し、も、違、は、な、い、併、し、に、銀、貨、を、封、入、し、て、上、封、に、宛、名、を、書、い、て、少、し、も、違、は、な、い、併、し、ば、上、封、に、銀、一、弗、と、書、く、其、送、り、方、は、手、紙、と、少、し、も、違、は、な、い、併、し、其、保、管、方、は、餘、程、嚴、重、に、し、て、あ、る、有、様、で、あ、る、其、銀、信、の、手、數、料、即、ち、酒、資、は、手、紙、の、割、合、と、同、じ、事、で、あ、つ、て、銀、一、弗、を、厦、門、ま、で、送、る、に、は、三、十、文、汕、頭、へ、送、る、に、は、四、十、文、香、港、へ、送、る、に、は、五、十、文、と、い、ふ、様、に、定、め、て、あ、る、一、體、斯、う、云、ふ、別、段、に、夫、を、業、と、し、て、居、る、者、は、無、い、様、で、あ、り、す、若、し、必、要、な、時、が、あ、つ、た、ら、ば、特、に、使、を、遣、る、位、な、事、の、様、子、で、す、總、て、臺、灣、の、人、は、下、等、社、會、は、専、ら、農、業、を、營、み、て

香港郵政廳に宛て送達方を其地の瀛船會社に托します又香港厦門上海歐洲等より参ります郵便物は香港では香港郵政廳厦門では英國領事よりトクラス瀛船會社へ托して淡水安平打狗等に送りまして英國領事が受取りて配達して居ります而してトクラス會社は別に多くの収入といふ程のものなく香港郵政廳より幾許の遞送賃を受けて居るとの事であり又外國人の爲替はヲブレク商會是は淡水に船を持つて居る英人の商會であつて此商會が重にも取扱つて居ります又彼日本兵が臺北を占領しました時劉永福は臺南に據りまして民主國を組織しまして前きの巡撫の唐景崧を以て民主と致しまして此の旨を諸外國へ通知しました而して官吏を登用して夫れノ一配置をなし土人を募りて兵とせし黒旗兵を合せて軍隊をも組織しました日本軍が段々南進するに随つて是等官吏は皆支那の本土

へ遊げて仕舞ひました土人の兵隊も散亂しましたそこで劉永福は臺南に據つて永久持積の積りで七人の議員を以て所謂國會を組織しまして必要な規則といふものは皆其議員の決議を以て行ふ事にした此時軍資に最も窮したと見えて此議院の決議を以て種々の方法で租税を徴収し又人民から義捐金を募り又別に軍租と稱へ官府の課税額によりて土人の財産の多寡に應じ其五分迄の税を徴したり又外國の關税法に倣つて關税を徴収したりならぬとして額りに軍資を整へて居た固より日本軍を逐ひ拂つたならば元の通りに支那政府の下に立つといふ事を明言して居つた又支那本土が困難に陥らば進で之を助力する同盟して居た是は或有力の人が劉永福を餘程助けて此組織の工合は固より又兵士武器を澤山送つたり又多額の軍資も送つた事がある趣である斯ういふ有様でありましたから紙幣とい

この三種であつた所が是は格らへ方が粗であつたものと見
 て随分偽物が出来たので其版は溶解して今御目に掛けた新切
 手を廣東版で印刷したのであります是も御覧の通り藍紫赤の
 三種類であつて丁度日本でも使ふ様な工合に廻りに穴を明けて
 手を以て切る事の出来る様にしておあります、此郵便切手を發
 する時に當つて手紙を出すもの即ち臺灣と支那本土との通信
 をあすには必ず此郵便切手を張らなければならぬと民主國の
 名を以て布告した、夫で厦門、汕頭、香港あたりへは皆郵便局の出
 張所の様な物を置いて中々嚴重にやつたのです、夫から又初め
 ての切手を發行の時には消印といふものをしなかつたから尙
 更偽物が多かつたに上つて此新たな切手を發行した時には消
 印法を行つて非常に嚴重に調査をした、けれ共夫程旨く行はれ
 なかつた様子であります、

ふものも發行しました、其發行した種類は一弗、五弗、十弗の三種
 である外に百、五百、千と云ふ銅錢に對する所の小さい紙幣も發
 行して居る、是は全く軍資を支へる爲に發行したものであつ
 て即ち茲に御目に掛ける所の郵便切手といふものも人民の便
 利を足すと云ふ主義では無くして全く金を取らうと云ふ策よ
 り斯う云ふ切手を發行したものです此切手に描きたる虎は即
 ち民主國の徽章であります、

此郵便切手を發行する前にモウ一つ發行して居りました、夫は
 金襴紙を用ゐて僅か五千枚發行しましたが其色は緑と紫と赤



色 紫



色 赤



色 藍

前に銀信の事を述べましたが夫に付て茲に通貨の事を御話し
 しやうと思ひます先づ臺灣全島で使用する通貨は即ち古來日
 本で使用する所の一文銭と同じ物で其他は銀貨でありませ
 銀貨は彼の墨西哥銀であつて大變な極印が打ち込んであつ
 て錢やら何やら分らぬ様になつて居ります私か或店で之を見
 て餘り毀んで居りますから其銀貨は矢張り一弗に使用する
 かと問ひましたれば商人が答へて申します是は斯んなに
 毀んで居りますから七十錢の價しかありませんと申しました
 夫れで毀傷したものは其重量によりて價を定めませぬと申し
 に至つては土人は其銀が澤山集まると一つく刃物で少し
 く削り取つてさうして其削り目を擦すが爲に多くの弗銀を子
 供の玩具にして置くといふ事でありませす子供は澤山の銀貨を

持てガチャ／＼玩んで居る中に自然に磨れて其削り取つた痕
 が擦つて仕舞ますると夫を使ひまして又外のものさう云ふ
 様にするといふことで又土人の専ら使用して居ります一文
 錢といふものは大抵支那から參つたものであつて中には十カ
 ナカ古錢家に見せたならば喜ぶ元明あたりの錢も澤山見受け
 ました夫で一文銭は先づ通貨の過半を占めて居る有様で其中
 の善い錢も悪い錢も混淆して十文を以て日本の一錢と交換し
 百文を以て十錢と交換し百二十文を以て一圓と交換をする
 いふ様にあつて居る又其の悪い錢を除けて善い錢ばかりに
 する時には百文で一圓と交換する様になつて居ります金貨と
 いふものは通貨の中では一向見ない同地に居る支那人は日本
 の五錢等の白銅錢を受取ることを好まぬ又外に支那で近頃
 銷た銀貨や或は「シンガポール」「アンナン」「シヤム」等にて通用する

銀貨銅貨杯を通用して居る事を見ましたが是れも一般に嫌ひ
 ます、今日の有様では日本の紙幣は官の注意に依つて夫れ
 引換る事にしてありまするが餘り人民が好みませぬで紙幣の
 一圓二十錢と銀貨の一圓と喜んで交換をするといふ有様であ
 ります、夫から彼の劉永福が臺南に據つた時に發行した紙幣と
 云ふものがナカ／＼面白くもので是れは今日固より通用はして
 居りませぬ、其紙幣の文章の中には日本人を逐ひ拂つて仕舞つ
 たならば五倍にして返すといふ事が書いてあります、私の見ま
 したのは一圓と五圓でありました、
 夫で劉永福の總ての軍費の支拂といふものはまだ其外にも澤
 山の紙幣を發行して支拂ひました、此紙幣は大變な價値のある
 ものであるから必ず受取らなければならぬと云ふ事を税關及
 び一般の人民に訓示した、尤も此の紙幣は外國人と手を組んで

同じ價を以て通貨に引換る事が出来る様になつて居つて二三
 週間は随分行はれたけれ共間もなく引換が止まつて仕舞つた、
 そこで又仕様がなから土地の豪富が擔保するといふ約束手
 形を發見しました、又劉永福は財政を維持するが爲に種々手を
 盡し臺灣島から廣東とか福建とかへ送けて行く者には皆其資
 力に應じて二弗若しくは四弗多きは六弗迄も人頭税を取つた
 事がある、と承りました、目下通貨の有様は左の通りであります

銀 貨

重 量

- | | |
|----------|-------------------|
| 五點銀(五錢) | 香港鑄三分六厘。臺灣鑄三分六厘 |
| 一角銀(十錢) | 全 七分二厘。全 七分二厘 |
| 二角銀(二十錢) | 全 一錢四分四厘。全 一錢四分四厘 |
| 五角銀(五十錢) | 全 三錢六分。日本鑄三錢三分 |

臺灣通用買賣以里數爲準祇值四角半銀用、錢

臺灣銅錢買賣通用不論何錢或乾隆嘉慶寬永康熙道光光緒崇禎順治一切共用俱皆一百〇五六個爲一角此乃現時街衢市價、若要選擇專樣名號錢價不一如光中景興此二錢名乃是歹錢、其中有三厚箔之別厚者百三四十個堪值一角銀箔者難用錢價無定、

衛生

是より進んで述ぶるのは臺灣が我が版圖となつた以上着々施さなければならぬ仕事ナカ、重大なる事と存じます事であります私共が考へますには先づ第一に衛生の機關を全島に普く布設する事が最も必要であらうと思ひます一體臺灣の土地と申すものは未だ十分に開けませぬ故に瘴癘毒が多くありまして支那の古い人の書いた物を見ますると是は七八十年

も前に書いたものであります夫に記してあるのは臺地は三十年程前は午の頃でなければ旅行する事が出来ない午からは前は四面霧が降り籠り路の上は露が雨の如く滴つて往來が出来なかつたといふ事を聞いたが我々が今辰の時に通るに最早露が乾いて霧も少なくなつて居る是で見ると餘程開けたものであると申して居ります又私も今日實地早朝五時に外出して見ましたが固より道路にそんなに露もありませんが四面の山は皆霧が籠んで居りました七八十年來餘程開けて居るに相違ないさうして氣候は先づ臺北でございませれば時に依つて段々變りはあります共昨年十月末頃に於きまして矢張り正午は華氏の寒暖計の八十度位夜分になりまして天氣が好ければ十度位下がる夫から雨が降りますと俄に下がつて五十五六度にあります天長節の時分が丁度正午が天

氣が好い時は八十度を除ゆる位で、雨が降ると五十四五度以下
 がつて居りました、南へ行きますると、臺南邊は臺北より十度位
 高い割合になつて居ります、モウ一層南の恒春即ち郵橋あたり
 へ参りますると十月の末頃で九十二三度位の有様である、尤も
 南の方は割合暑いに相違ありません、宜しいと申す事であり、之
 ませぬから却つて身體の爲には宜しいと申す事であり、之
 に反して臺北、雞籠、淡水あたりは寒暖の差が最も激しいので晝
 暑くつて夜は俄かに寒くなるのであります、から風邪を引
 易い、さうして其風邪と云ふものがマラリヤ熱となる、醫者に聞
 いて見まするとマラリヤ熱で倒れる者は至つて少ないがマラ
 リヤ熱に罹ると大に衰弱するもので其衰弱の所へ色々病氣
 がつけ込む即ち其人の身體の短所へつけ込むから肺の悪い者
 は肺病を起し心臓の悪い者は心臓病が起る脚氣病の平素ある

ものは脚氣病を起す等種々の餘症を惹き起して夫で倒れる者
 が多い、さうして此瘴癘の氣と云ふものはさう云ふ場合に多く
 あるかと尋ねて見ますると雨の降るときか或は夜分に多い、土
 地の下等社會と云へども相應に注意して居ります、況して
 中等以上の人になりますると雨の降る日や夜分は決して往來
 をしない、公務又は緊要な事で往來をしなければならぬ時には
 必ず駕籠に乗る、其駕籠は所謂輪と云ふものであつて御目に掛
 けた寫眞の如き物であります、
 さて此駕籠は夜中雨中に往來するばかりで無く我々が道中を
 するにも馬を用ゐなければ此駕籠を用ゐる方が最も宜しい、此
 駕籠の中には腰を掛ける様に少し寝る工夫にも出来る、さう
 ならば後には枕の様な物があつて少し寝る工夫にも出来る、さう
 して昇くには通常は前後二人なれど前に二人後に一人と三人

色々々の物品を素見しました、夫は臺北城中では夜中も日本人が
 救なく通して居る夫を私は始終通して店に陳列してある
 たものでなければ許さない仕来りであるけれども日本人は容
 通する様にして居る、尤も此を通するは其町内に面知れ
 て夫には本屋より屋根が續いてあつて暑い時や夜中は其處を
 皆煉瓦で拵へた家の外へモウ一つ煉瓦で附け出しがしてあつ
 るが夫は臺北城中の市街であつても又城外の市街であつても
 は知りませぬから随分夜中は運動の爲に市街を歩いた事があ
 常に夜氣を恐れて居る、私は彼の地へ参つた時分にさう云ふ事
 太陽が西に没するならば戸をビシヤリ／＼と締めて仕舞ふ、非
 人の店は我々が夕方買物に行つて未だ其家に居る場合と雖も
 で晝は炎熱を防ぎ夜は瘴癘の氣を禦ぐやうに出来て居る、支那
 で内は晝と雖も薄暗いやうな有様である、併ながら是が經驗上
 の晝は炎熱を防ぎ夜は瘴癘の氣を禦ぐやうに出来て居る、支那

して昇くのもあり又前後四人して昇くのもあります、其乗つて
 から揺り／＼とする所は誠に工合が好いものであります、
 さう云ふ譯でありますから自ら家の構造も日本の内地の如き
 物とは丸で違つて居る、良い家は皆煉瓦か然らずんば土を煉瓦の
 様に器械へツメて押し抜き干し上げ夫れをモルタルにて積み
 上げたものである、一體臺灣の土地と云ふものが臺北近傍の如
 きは皆粘土である、夫で土を以て製した煉瓦の様にした物、土人
 土瓦と稱すを以て農家共は造つて居る又立派な煉瓦屋でも内
 の壁になる所は大抵之を用ゐてあるさうして其煉瓦なり煉瓦
 の様に拵へた土の塊りなりはどれ位の厚さであるかと申すと
 先づ大きさは日本の煉瓦と同じ様なものであるが其厚さは先
 り薄くとも一枚半、厚いのは二枚位併せて積み立てゝ居る、夫か
 ら支那人の居る家は大抵一方口で前と後に一つ宛口がある、夫

借りて居りました夫は即ち先刻申した通りの支那流の家の仕
 組であつて私の居る坐敷の向ふに一つの口があつて其側らに
 極く小さい明り取りの格子がある計りである夫で起臥をして
 居りましたが夜になるとスツカリ戸を締る夫故にか一度も風
 邪を引いた事がなかつた所が總督府の元との布政司の藩庫廳
 と云ふ所へ役所を定めまして其中程に事務室を拵へ其兩側は
 煉瓦で出来て居ります夫を部員の居る所にしまして自分の
 部屋は未だ経験が足りませぬものですから空気の流通の良
 様にしたら宜いと考へて其事務室の邊を板で以て仕切つてさ
 うして前の方は竹格子にして木綿を張り後の方は狐格子を見
 た様お上げ下げの出來る戸が有りましてから夫を木綿で張つ
 てさうして板敷の上へ粗造を置いて薦を敷いて起臥の
 出來る様にしました其一方は部員の居る所と隔つてそこに一

澤山往來しますから支那人が力めて店を開いて居る有様であ
 つた夫を通行しました故か一向何れも感じなかつたが或晩の事
 其軒下でない市街の真中を一時間計り運動をして歩いて歸つ
 て平常の如く寢ました所が翌朝に至つてスツカリ聲が出ない
 夫からどう云ふ譯で聲が出ないかと思ふて醫者に聞きました
 れば夫は昨晩外を歩いては夫だからさう云ふ事にな
 と答へたさうすると醫者が言ふには夫だからさう云ふ事にな
 つた決して夜分歩いてはいけな、夜分歩くと聲が出ぬ様にな
 るが夫を其儘にして置くからば必ずマヨリヤになるから早く
 養生をしなけれは不可いと言はれまして即ち「キニ子」刑を
 用ゐましたが一週間も経つと漸く聲が出る様になつて幸にし
 てマヨリヤには變じなかつた夫からモウ一つの經驗は私が初
 め參つた時には臺北の西門外の野戦郵便局の奥の間を一部屋

つので煉瓦の壁がありました、さう云ふ風な仕組でありました所
 が出来上つて引越をした晩に直ぐ風邪を引きました夫から養
 生をして治る又引く又治す遂に僅かの間に四度風邪を引きま
 した是では不可ないと云ふて遂にメツクの舊い物を荷物の中
 から引張り出して来て夫を綴ち附けて夜氣を防ぐ様に居
 りました夫から寢臺の外へも洋布を吊して夜氣の來ぬ様に防
 ぎまして漸く風邪を引かなくなりしました、さう云ふ譯でありま
 するから西洋人の建築して居る家を見ますると下の方は多く
 物置にしまして二階を自分の居間及び事務室にしましてさう
 して壁の厚さは大抵煉瓦が二枚です其上を漆喰で塗つて居る、
 夫から大概の家が二階の外に幅の一間半もある様が出来て居
 て其外に欄干があつてそこを運動場にして居る、夫から南の方
 へ参りますると暑さや夜氣を防ぐが爲に竹の網代を見た様な

物で其欄干の外を覆ふてあるさうです、さう云ふ譯でありま
 るから日本の様な家を彼地へ行つて建てたなれば暑い時には
 非常に日光が通つて熱いし又夜分は夜氣が這入つて決して健
 康を保つ事は出来まいと思ひます、夫で私が此地へ歸りまして
 から或人が彼地へ宿屋を開くに付て「ヤント」日本風の家の仕
 組をして彼地へ持つて行つたならば地所さへ擇べば直ぐ建て
 られる様に致したと申して自慢をしますから私は大に夫を
 笑ひました、さう云ふ経験の無い事を日本の多くの人達がする
 から何事をしても失敗する事である、決してそんな家は役に立
 つもので無いから實地に行つて能く見てさう云ふ仕方な
 らば宜いと云ふ事を認めて夫からにするが宜からう私が見る
 所ではどうも日本の様な家は彼地では不可ない、是は先づ御止
 しさるが宜からうと申しました事もありません、衣類は下着にはメ

リヤス等ははいけませぬフヲチルに限りませぬ、メリヤス等の類は
 汗を吸取して寒くなつたとき其漏り氣が肌へ觸て悪寒を生じ
 ます、さうすると風邪を引きてマヲリヤの媒介をします、フヲチ
 ルは汗を吸収しない故に汗が出て居て寒くなつても悪寒をし
 ない又夜具の間には毛布を二枚敷きて其間に身體を入れて寢
 るが一番宜しい、木綿等の蒲團を直接に身に付けると夜中過か
 ら濕氣が來てツト／＼とします、大甲溪に蘭を以て巧に造つ
 て大甲筵と申す名産がありませぬ、是は濕氣を防ぐものであつて
 夜具の一番下へ敷くには最も衛生に宜いと申すことでありま
 す、夫から水はどろどろであるかと申します、水の中に格魯兒硝
 酸、石灰其他有機物があります、夫では水の性質が悪いかと申し
 ます、すると臺北あたりは新たに掘つた鑿貫き井から出る水は非
 常に買ひ水であつて其筋の検査した所に據ります、内地の

水よりも立派なものであると申す事でありませぬ、併ながら矢張
 り其邊が汚いですからどうしても有機物が這入る夫で彼地へ
 参れば生水は決して飲まれない、
 又食物の原料はどんな物があるかと申します、先づ海の魚
 で云ふならば鱒、鯉、鯛といふ様な物は能く目に留つて居りませぬ、
 其外内地で一向見ない魚が澤山あつた、又魚類の澤山ある證據
 は私が社寮島へ行つて船から揚つた時には丁度退潮の場合で
 あつたが其船着きの岩の上には潮にひき残されて色々の魚が
 躍つて居つた、夫を十二三も拾ひました、其魚の中には鱒も居り
 ました、其外は内地で見ない斑紋の澤山ある魚であつ
 た、夫から川魚は第一内地の物と少しも違はぬのは年魚である
 是は香氣も味も内地の者と一向違はない、又鰻も二種ある、一種
 は内地の物と同じことでありませぬ、向違はない、又鰻も二種ある、一種

うな何か厭らしい形をして居る、夫から蝦魚も居ります、鯉も鮒も
 も、鮒も泥鰌も居ります、又日本に無いコーイと云ふ魚が居り
 ます、夫は鮒のやうな身体で、夫程頭の大きく無い口髯も無いも
 のです、一體彼地の魚は鮒や泥鰌の如き物でも口髯が非常に多
 くて長い、又鼈が澤山居る、私が土人の賣り行き居るのを見たに
 三尺周りもあるのを見ました、價を問ふたらば一圓と申しまし
 た、鰻は喰べた者の中には虎列拉に罹つて死んだ者もあるから
 是は注意すべし事と思ひます、
 夫から野菜類は市に出て居るのやら又農家に植ゑてあるのを
 見ましたに大抵な物はあります、先づ廣東菜、韭、大蒜、葱、人參等は
 内地と同じ物、夫から三葉芹、通常の芹杯はナカ〜大きな物が
 あります、南瓜、西瓜の如きものは一抱へもあるのがあります、大
 根は粘土の勢か根が至つて小さくあります、筍子は年中大抵あ

ります、其種類も色々ある様ですが私が見ましたのは刺竹一に
 棘竹と申す竹の子であります、夫は非常に刺のある竹で、其筍子
 は多く親竹を切つた株へ群つて生へて居ります、是は私共喰べ
 ました味が随分宜しうございます、併し或る支那人の書いた
 書物を見ましたに此筍を喰べると髪が抜けるとありました、其
 外に蘇竹と云ふものがあります、夫は専ら寒い時に生へる竹で
 あります、外に筍子に似た眞菰の若い莖を皮を剝いて賣つて居
 りました、是は如白筍と稱します、牛肉の調味にして喰べますな
 らばナカ〜好い味のある物であります、夫から茄子は丈が七
 寸位ありまして後堀と申す所から南へ参ります、其樹は灌木
 の様に年中枯れず春になると樹から葉が出て花が咲き、茄子が
 實るさうです、併し其茄子は輪の様に曲つて居りますから、束ね
 て賣つて居ります、夫から薩摩諸はナカ〜味は好い、二三種あ

る様であります、又薩摩諸の若い葉を彼地の人は喰べる様であ
 ります、夫をば芋菜葉と稱へて賣つて居ります、此の蓮芋には三種類程あ
 ります、其中に一種最も味の好いのがあります、芋の兒の見掛け
 は非常に醜いけれども、其外に日本で云ふ琉球芋といふ
 ものゝ生へて居る所を見ましたに何年も莖が枯れないものと
 見ゆて丁度櫻桐の木の様になつて三尺程も高くなつて其上に
 葉が出て居りました、夫から生薑は非常に能く出来て肉が肥へ
 て味は適度に辛くて好い、夫から日本で薤葉と稱する物があ
 ります、夫は畑に作つてある所を見るに丁度唐辛の木の様な物が
 はふて居て夫に牽牛花の花の小さい様なものが咲いて居ります、
 夫から菘蓂草、高首の類も澤山あります、高首は赤葉と青葉と二

種あります、夫で野菜類は大抵無いものはないと思ひます、
 夫から肉類は先づ鶏が澤山あります、是は至る所鶏を飼ふて居
 りますから自由なものであります、又水牛が農作用に家々に飼
 ふてありますして夫を食用にもする様であります併し水牛の肉
 は非常に硬くて味はありませぬ、野牛も處々に飼ふて居ります
 南の方へ参れば通常の牛も飼ふて居ります、土人の重に食用と
 するものは豚の肉であつて臺灣の豚の肉は餘所の豚の肉と違
 つて非常に味が好いと云ふ事であり、此豚は家々に飼つて
 居ります、夫が皆妻君の収入に關するものであつて、往來等
 に豚が歩いて居る汚いから杖を以て逐ひ拂ひでもすると家の
 中から妻君が非常に怒ります、夫から鷺鳥、家鴨のやうなものも
 澤山あります、又鶏卵は澤山あります、日本のは決して忘れても
 生で用ゐられぬといふ事であり、日本のは鶏卵を能く生

で用ゐますが彼地のには梅毒とか或は天刑病とかに罹つた者が多くて其者の唾液を喰つた鶏の生んだのがあるから生で喰べると非常に危険なと申す事であります大に注意すべき事と考へます、

又菓物のことに付て申しますればナカ、彼地の菓物には旨い者があります、先づ其種類を申せば朱樂です、朱樂にも中の紫のと白いのとありますが紫のは誠に甘くあります、白いは消化が非常に悪い、夫で土地の者は餘り喰べませぬ、白いはべて居ります、夫からバナナ、柿、日本で云ふ唐蜜柑、臍蜜柑、梨等は皆其味が實に好いものでナカ、日本にある物の類では無い、夫から彼地で最も珍重する所のものは臺灣語でサンア、と云ふ英語でマンガ、と云ふ物である、夫は瘴癘毒を拂ふと云ふ事であつて實に味の好い物である、多く砂糖漬にして

ある、夫は臺灣では様と云ふ字が書いてあります、是は字書を引いても無い字であります、俗に酸仔と書きますがこれは嘉義と云ふ所から南でないとない、日本から参ると彼の朱樂等は非常に味も好し且つ炎熱の場合には生水を飲む事が出来ないので多くの人が此の菓物を澤山に喰べる、其喰べる人の考といふものはどう云ふ考かと云ふにコッパに水を一盃位は飲んで構はなから此菓物を大きなのは二つ三つ、小さいのは四つ五つ喰つても宜いだらうと云つて喰べます、所が中にも紫のは消化が悪いから忽ちに身體に障つて之が爲に赤痢を發したり甚しきは虎列拉になつたりして倒れた者が段々ありました、

夫から市中へ参りますと大抵何處でも檳榔樹の實を賣つて居ります、夫は大抵檳榔樹の實は四五月頃に結ると申します、其實の中の仁を取り出して其青いのを籐の葉で巻いて店前に

陳列して側に小さい壁に何か味噌の様な薬を盛つて居ります、
 夫を土人に聞きませするに其薬を籐の葉で巻いた柘榴子の先き
 へ付けて夫を嚼んで咀嚼へては吐き出す、是は全く瘴癘毒を掃
 ふが爲に用ゐるものと申します、其外大抵女子供に至るまでも
 煙草を好みますが此煙草を用ゐる所以も矢張り瘴癘毒を拂
 ふ爲と申しして居ります、夫から外國人は臺灣に居つては咖啡を
 飲むが宜しいと云ふ事を勤めます、是も矢張り瘴癘毒を拂ふ爲
 であると申します、又紅茶も瘴癘毒を拂ふさうです、又阿片も全
 く瘴癘毒を拂ふが爲に用ゐる物であつて是は過度に用ゐる故
 に大なる疾病を來たす様であります、瘴癘毒を拂ふと云ふ點に
 所は何れにあるかと云へば瘴癘毒を拂ふと云ふ點にあるとい
 ふ事でありませす、阿片の事に付て御話をしますれば或は禁じな
 ければならぬと論ずる人もありませすがナカク、最初味の好

いもので無く且又非常に高價なものであるさうです、既に劉
 永福の阿片代が一ヶ月千弗近く要ると云ふ話を聞きませした夫
 で下等品を用ゐるにした所が一ヶ月二百兩や三百兩の錢は要
 る趣であります、すからナカク、旨くも無いものを夫程の金を出
 して喫まうと云ふことは無い筈であつて其味の出る迄には二
 三年も喫まなければいけないさうです、尤も花柳街へ参ります
 と阿片を喫むが丁度日本の酒を飲むやうな風であつて喫まぬ
 と極りが悪い様です、から譯の分らぬ者は此邊から迷ひ込むか
 も分りませぬが私共の考には目下ヤツ氣となつて禁止するに
 も及ぶまいと思ひます、
 夫で先づ我々の最も注意すべきは生水を飲まない事や又不潔
 の藥物類を多く喰べない事、夫から總て野菜類でも魚類でも生
 なものは喰べない様にしななければならぬ、さうして滋養分のあ

る物を適度に用ゐて適度の運動をしなければならぬ、チエット考へると臺灣の如き熱い所では極く淡泊な物を喰べて居て餘り濃厚な滋養分の強い物は喰べないが宜からうと思ふ人もありませうが是は全く違ひます、矢張り成るべく肉類や何か滋養分のある物を喰べてさうして適度の運動をする様にしなければ不可ない、決して内地に居て淡泊な物を喰べて運動をしない様な事のない様にしなければならぬ、夫から雨中とか夜中とかは成るべく出歩きはしない様にしなければならぬ、斯う云ふ風に注意するならば身體の虚弱お人と雖も決して住居せられぬ事は無い、併ながら軍人や警察官其他軍夫とか郵便脚夫郵電の配達人と云ふ者は夜を胃さねばあらぬ事もあり雨を胃さねばならぬ事もあつて公務上實に致方も無い事でありませう、けれども共成る丈け雨には濡れない様、夜氣を吸收しな方法にし

て勤めなければならぬと思ひます、丁度十月の末頃の統計表に據りますと日本の人が上は立派お人より下は軍夫に至るまで鶏籠港へ揚つた人が九萬人餘りあつた、其中で彼の地で死んだ者が一萬人餘りで病氣の爲に日本へ送り還された者が四萬人餘り尤も途中で死んだ者も澤山ありませう、亦日本へ歸つて来て死んだ者も澤山あるだらうと思ひます、未だ其時に彼所の病院に居る者が三千人餘りあつた、又其居る場所へで劇だしく無い病氣でそこで療養をして居る者が三千人もあらうと云ふ事であつた、さうして見ますと先づ働いて居る者は殆んど三分の一位なものであつた有様です、尤も此頃の報知に據りますと段々病人が減つて来る様な有様であります、斯う云ふ形勢でありますからせうして衛生上の事は第一に能く機關を備へなければならぬと思ひます、其機關を備へるに就てはせう

に水が臭い、水の臭い所は其土地が必ず臭い證據である、私の國
 が以前熱病が大變に流行つた所が外國の領分となつて頻りに
 清潔法を施し又下水を疏通したので病氣と云ふものは段々と
 少なくなつて參つた、夫だから此臺灣も日本の版圖となつた以
 上は充分に清潔法を行ひ、溝渠を疏通したならば必ず熱病が無
 くあつて仕舞に相違ないと私は自分の國の經驗を以て證據立
 てる譯であるを答ました、さうして見るならば此清潔法を行ひ
 溝渠を疏通することは第一必要でさうして地方廳、守備隊、其他
 諸官衙市場等の要所には病院を普く置いて治療を十分に
 施すことは最も急務中の急務と思ひます、且つ彼の地には蠅が
 澤山で又床虫も居るし蠅といふ虫も居ますから渡臺する人は
 是れ等の殺虫剤の用意は必要であります、又防熱劑、健胃劑、風藥
 寶丹等を用意すること尤も肝要と思ひます、

しても早く市街の清潔法を爲し又下水の溝を能く疏ける様に
 し或は場合に依れば下水を疏けるが爲に溝を掘り貫くと云ふ
 様な事を所々しなければあるまいと思ひます、私は或時に大稻
 埕の吳文秀と云ふ茶商の家に參りました事があり、其時色
 を話をしました、場合に一人の日本人の色黒い様な先生が洋
 服を着て其席へ這入つて來ました、何處の人かと問ひました、
 ば暹羅の人でありました、そこで是は幸ひと思ひまして、貴君は
 何時此地へ出たかと聞きましたら、三ヶ月程前に參つたと
 申しました、夫から話の端緒を開いて臺灣は熱病が盛んに行はれ
 て随分困難な場所であるが、貴君はどう思ひますかと、聞きました
 れば、其者が申すに、イヤ臺灣は大變臭い所である、私はモウ
 三ヶ月居るが本國へ歸りたく無くなつた、と申しました、夫は
 云譯で貴君は大變臭いと思ひますかと云つた所が臺灣は大變
 臭いと思ひますかと云つた所が臺灣は大變臭いと思ひますかと云つた所が臺灣は大變

兵備

夫から第二番には兵備の事でありまするが是は固より其筋に於て夫れ御詮議のある事と思ひますから我々が敢て申す迄もありませぬ然るに一體あつた土地の人間の有様と申すものは歴史から調べて見ますと實に標悍なる性質を遺傳して居る事が分ります夫は諸君も御承知の通り最初にも申た通り明の嘉靖の頃日本人が林道乾を押して主となし臺灣に入りてより又顔思齊と云ふものが日本人と共に此に據り鄭芝龍もこれに付隨し夫れから彼鄭成功が大軍を起し其後清國が征討して臺灣府を置いて後ちも或は朱一貴とか林爽文とか林武力なぞといふ強盜の親方のやうな者が時々起つて亂が絶へない夫れ清の政府は之を征伐するに誠心して居る既に道光十三年の頃も嘉義の人張丙黃城といふものが謀反を起して縣合方振聲

協守備馬步衝千總陳玉威及振聲の妻張玉威の妻唐杯或は討死し或は殺された事があつて清政府は夫を征伐するに非常に困難して何でも臺南鳳山あたりで以て三四千の兵が死んだと云ふとであるさう云ふ譯であるから疾くより兵制といふものは非常に重きを置いた事である其兵制の舊い所の概略を申上げますると所謂中營と云ふものがあり左右營といふものがある其一營は將校を除いて總て八百五十餘名のものもある又要所にも城を築きそこに常備兵が皆附いて居る又は守備の爲でもあるし又司法行政にも關して居る様でありますが汎といふものがあり塘と云ふものがあり堆といふものがある其汎といふものは先づ海縁の船の寄り附くやうな所塘といふのは河の堤のやうな船着場堆といふものは町の入口でありますがさういふ所へは皆守備兵を置いてありました夫から其外に土人に相

人間が亂を好む様な習慣で丁度日本に云へば丸るで元龜天正
 時分の人間と同じ事でありませぬ故に女と雖も軍さといふものは
 は何事も可憐者とはして居らない總て一體が人間といふものは
 そんな刃物三昧をして死ぬるが本當の事であると思つて居る、夫
 だから不都合を企てた奴を捕まへて首を斬るのに昔従容とし
 て死に就く中には色情を以て日本人を導いて殺した女もある
 夫れ等の首を斬るに一向平氣なものである、此間も土匪の起つ
 た時も宜蘭の方から或る日本人が這がれて出掛けたり所が四面敵
 であつてナカ川の中へ這入りたり山へ攀ぢた
 中へ這入りたり川の中へ這入りたり下つたり山へ攀ぢた
 りして四晝夜も掛つて漸く鶏籠近くまで追がれて来た所が四
 晝夜も飯を喰はないで漸く鶏籠近くまで追がれて来た所が四
 喰ひたいと思つて或る民家へ寄つた所が女が出て来て飯を

當の給金をやつて所謂屯田兵の様に平日は農業をして居て一
 朝事のある時には直ぐに起つて兵となるものがある、是は義勇
 兵と名けて居る、併し是は或る支那人が論じて居るのには此義
 勇兵の制度といふものはチヨット其の様に居るのには其後來
 に至つては或は却て矛を逆まにして害をする様な時が出來は
 せぬかと憂慮するに云ふ事を論じて居るものがある、是は實に
 此人の言ふ通り何にか不満足のことがあると直ぐに矛を逆
 まにしてやつて來る事が往々ある、即ち今日土匪と稱へられて
 所々に起る奴でありませぬ、夫れから又海防には夫々砲臺を築いて
 鐵砲を備へると云ふ事は近來大に擴張して居るし又近來は生
 蕃の境には撫聖局と云ふものも置いて砲臺といふものを築き
 兵力を以て生蕃の領分を攻め取つては其所を開拓して行くとい
 いふ政略をやつて居る斯う云ふ仕組で來て居りますから總て

(汝來れ)と云ふからは是れは幸だと思つて這入て飯を喰せて呉れ
 と云ふと快く茶碗へ盛つて持つて來た、箸を把らうとする、其
 女が抱き附いた、抱き附くと側壁の間から鐵砲をトンと撃つ
 たが幸ひに當らなかつた直ぐ刀を抜て女を斬り進んで壁の後
 に居る男を殺して又再び逃げ延びて漸く鶏籠まで來たといふ
 事でありませう、さう云ふ譯で女も中々大膽の事をする斯う云ふ
 風な人間でありませうからどうしても充分に兵備を嚴重にし
 て鎮壓しなければ彼等は弱いと見れば必ず起つて來る又威力
 が盛んかと思れば平氣で良民の真似をして居る又武器は何處かへ隠
 に日本良民杯貼り出して農業をして居る又武器は何處かへ隠
 して居る、さう云ふ奴は時に嘯集して良民を規かして財貨を掠
 奪する夫を兵隊が攻めに行く、路が悪いものですから何日も
 掛かる其中モウ好い加減に亂暴をして置いて何處へ逃げて行

のだから分らない、さう云ふ譯でありますから自から兵の分配方
 も餘程緻密に行かなければなるまいと思ひます、

行政

第三には行政の普及を圖らなくてはならぬと思ひます是も固
 より當路者に於きまして夫々方案はあらうと思ひます、
 の考では随分困難であらうと思ひます、先づ人間の種類から申
 しますると彼土着の土人と申す者が居ります、是はさう云ふ種
 類かと申すと即ち向ふの泉州、漳州、潮州あたりは無頼の徒が臺
 灣へ參つてそこに居住を構へて子孫相繼で來て居る者であり
 ます、是が即ち先刻も申した土匪とある奴であつて最も御し悪い
 奴であります、夫から支那内地から參つて盛んに商賣をして居
 る者が澤山あります、是は廈門とか福州邊に本店を持つてゐて
 臺灣が支店のやうな形でやつて居る夫から熟番と申すのは生

蕃の少し進化したものであつて、是は重もに山の方に住居して
 居る、夫から山の中には一種未だ文明の空氣を呼吸しない所の
 生蕃が居ります、是はナカノ、摩悪ある人相をして居りまして
 支那人が頼りに自分の境域を占領するに付ては實に終天の仇
 敵と思ふが故に支那人を見るからば必ず夫を殺したいといふ
 念慮を持つて居て時々出て来ては支那人を殺し首を取つては
 高名とする、夫で生蕃社會では其首を餘計取つた者が名譽があ
 る有様で恰も勳章の如きものである、其首を澤山取つた者でな
 ければ酋長にある事も出来なく又長い妻君を持つ事も出来な
 い事にあつて居るさうです、此生蕃の組合では日本で村といふ
 所を社と稱へて居ります、支那人の書いたものに據りますると
 或は九十六社ともあり又百貳社ともあります、が今日はとれ位
 あります、かまだ確かには分りませぬ、其社は二十戸或は四十戸

或は百戸といふ様にあつて固より定つた事は無いさうです、其
 全體の人員が凡そ六七萬人はあらうといふことで、其毎社の
 分界は非常に正しいものであつて、森林鬱蒼の中に居ります
 から其境界は或は樹木の根や石に印しを刻み附けて居るさう
 であります、此境界といふものは決して相侵すことは無いさう
 です、又其社毎には酋長があつて其社を取締つて居つてナカノ
 規律は正しいものださうであります、私が西班牙人の宣教師の
 所へ行きました、段々話を致しました、時に生蕃の方へ傳道をし
 て見たか、と問ましたら、答へて申します、に自分は十八年以
 來此地に參つて頼りに生蕃の方を誘導して見たが、今日に至る
 まで一人の洗禮を受けられた者が無い、併しながら生蕃は實に願
 の人民であつて決して約束杯を違へる様な者で無い、且一夫一
 妻を守つて倫理上に於ては誠に堅いものである、尤も熟蕃は段

々々譯が分つて既に自分の洗禮を施した者が四百人もあります
 と申ました夫から又外に外國の人が澤山參つて居ります其國
 分けを申せば獨逸、西班牙、佛蘭西、英吉利、亞米利加、和蘭、印度等
 ありまして尤もそこに住居を構へて居るものは先づ臺北、淡水、
 雞籠、臺南、安平、打狗あたりで男女六十名ばかりもありませう、中
 に宣教師が十四五名もありませう、外は大抵茶、樟腦、砂糖等の商
 賣の爲に出で居るものであります、尤も右の各國の領事館があ
 ります、重にも商賣の方で手を出して居るのは英吉利人と獨逸
 人であります、其他商業の爲に本嶋に往來をする外國人は澤山
 あります、夫から本嶋が新販圖に歸したに付ては日本人は續々
 と渡行を致して中には移住する者もあらうと思ひます、斯様に
 人間の種族が澤山ありますから行政の上には彼是困難を感ず
 る事と思ひます、

教育

夫から一體士着の者の教育上の事はどう云ふ有様かと申す
 るに歴史に據りますると康熙二十四年に學館を臺南の方に建
 てたといふ事が見えますから察するに要所には大抵學館は置
 いてあつたに相違がありません、又町々には日本で言ふ寺子屋
 やうの儒者が開いて居る學校もある様であります、既に猛艸街
 の入口に立派な家が明家になつて居ります、其戸の口に赤紙
 に書いて貼てある聯を見ますと皆教育の意味を含んだもの
 であります、即ち

家居化日光天下、人在春風和氣中、
 と云ふ様な聯があります、夫から書籍を賣つて居る所を尋ねま
 すると大抵彼科擧に用ゐる書籍類ばかりであつて外の書物は
 小説位のものであります、此科擧の書籍が澤山ある所を見ると

どうしてても學校のやうな物が段々開いてあつたに相違ない、既に
 北城の中にもどれかの建物は學校であるだらうと思ひま
 す、劉銘傳の世話で洋學校も開いてあつた趣であります、兎に角
 年の若い者は大抵相應に文字が通じます、尤も四十以上の人に
 なるると百姓杯は文盲者が多い、又今日保良局といふ物が出来て
 居ります、夫れは所謂土地人民の總ての便利を與へるが爲であ
 つて申さば内地の區役所若しくは町村役場を見れば様なもの
 あり、申す、此總理初め夫々の役員とは私共も交際を致しました
 が皆十カ、文字のある人であつて詩文は達者に出来、別
 して支那の本式の學問をして居るものと見なして對句など
 は十カ、名入であります、其中には秀才といふ者もあります、
 裏生と云ふものもありません、進士といふ者もありません、中
 候補とあつて居る人杯もありません、

租税付戸籍刑罰

夫から又租税の有様を見ますると舊の田制は所謂堡甲の制で
 あつて六尺を一弓と稱へ二百四十弓を一畝と稱へ一丈二尺五
 寸を一戈と云ひ千戈四面を一甲と云ふ此一甲といふもの十一
 畝三歩餘に當つたものであります、是は清の雍正七年頃に改
 めて全く十一畝を以て一甲と致してあります、そこで徵税の法
 は上田一甲に付て粟で二石七斗四分、中田が一甲に付て同じく
 二石八斗、下田が一甲に付て同じく一石七斗五分であります、夫
 ら畑が上畑は中畑と同じこと、中畑が下畑と同じことであつて
 下畑が一石七斗一分であります、夫れから畑を新に開墾すると右
 の法に準じて三分の一位を取てあります、又段々後年に至つて
 は新開地は昔下田として一甲が六分五厘、又五分五厘位に定め
 てある様であります、是は大分昔しのことであり、其後

幾何かの制度が變つて居るかも知れませぬ、夫から糖税と夫から稱へて甘蔗を挽く、牛の挽臼へ掛けて取つて居るかも知れませぬ、又糖税と夫から稱へて甘蔗を挽く、車に取つてあり又木微と稱へて家の園の中に菓物を作る、と夫から取つてあり又漁具税、取つてあり又漁船は沼や潭から取つてあり又漁具税、があり又、夫は網の類に依つて取つてあり又、あり又、夫は茅葺とで差が附けてある、夫から、番餉と稱へて租税を徴收して居る、併し今日では此の目の最も、著しきものは海關税とか地租とか厘金税とか、か、其厘金税といふのは所謂通過の例へば茶とか樟、ます、其厘金税といふのは所謂通過の例へば茶とか樟、腦とかを町から出しますれば其の出所は勿論、其通過して行く所の町へ出るのと、併し、此類は大きなものであれば、たさうです、併し、我が版圖に歸

單文

臺灣布政使司 光緒 年 月 日 給 收執 庄別甲 分厘毫 坐落 縣文報 字第 號 附無部院劃 奏明清丈陸科 縣文報 字第 號 庄別甲 分厘毫 坐落 縣文報 字第 號 臺灣布政使司 光緒 年 月 日 給 收執

根存

臺灣布政使司 光緒 年 月 日 給 收執 庄別甲 分厘毫 坐落 縣文報 字第 號 附無部院劃 奏明清丈陸科 縣文報 字第 號 庄別甲 分厘毫 坐落 縣文報 字第 號 臺灣布政使司 光緒 年 月 日 給 收執

號合同

殖産付鳥獸

内地と違て一種特別の事にならなければなるまいと思ひます、次に殖産興業の事は最も急務と思ひます、先づ臺灣特有の物の重なる物を挙げますれば茶、樟腦、砂糖、米であります、茶は昨年の調べに據りますると公然と輸出した物が十三萬七千ピコル(一ピコルは即ち百六十匁一斤の百斤であります)此價が三百六十萬兩であります、樟腦は同じく公然と輸出した物四萬ピコル此價が二百四十萬弗にあり、砂糖が同じく公然と輸出した物が七十三萬五千六百六十三ピコル此價が百八十九萬七千九百兩であります、此中税關の無い所で随分ジャンクで私かに輸出したものもありませうから夫を能く調べて見たらば右の倍もあるだらうと思ひます、米は全島の上から見れば十カ、澤山ある様でありますが一箇南の方は輸出をして北の


方は輸入をする事になつて居ります、夫で何分未だ調査が行き届きませぬ、茶は専ら臺北から新竹あたりまでが宜しいと申し居ります、其植方といふものは皆間を置いて一本立に殖へてある、さうして一年に七度位は取るさうであります、是は今日で宜しいのは一番、二番、三番位であるさうであります、是は今日では臺灣製と申して實に世界に名を轟かして居ります、或英人が他の場所にて臺灣で製するものと同一方法を以て製しました、たけれ共さうしても臺灣の土地で無ければあつた、實に心地の好い香氣といふものは出来ないうであります、さうして輸出先きは亞米利加の方や英吉利、佛蘭西、露西亞までも行くさうであります、茶商に就て聞きますると其國に依つて夫々向きがあつて其向きに應ずる様に製するさうであります、上等の茶にありますると一斤が六七圓もします、其茶を製する所は重にも大稻

ふ米を喰べて見たのに澱粉が澤山あつてさうして卵の蛋白質
 臭い誠に味の少ないものであると申して居りました
 前に述べた砂糖や茶や樟腦の大なる利益といふものは皆今日
 の所では英人や獨逸人の収益となつて居りまして尤も當人の
 名前を出さず支那人の名前で支那人が仲買人となつて居る、さ
 うして原料は幾許の前金で買収して居る其出來上つた時に見
 本を見て價を定めて買ひ取つて差引勘定する譯でありますから
 今日日本人が澤山なる資力を以て夫に掛らうとした所が夫を自
 分の手に入れる方法が無い様であります私共が思ひまする
 には畑地は随分澤山あるから先づ地所を求めて其土地により
 茶なり砂糖ちりを植ゑ付けて別に生面を開いて臺灣に於て最
 も宜しき所の此物産を發達させる方が捷徑であらうと考へま
 す、樟腦は支那人が生蕃境で切り出して來るものを外國人が買

埋にありまするがナカ／＼盛んであつて家々に五六千人も女
 を雇つて茶の良いのと悪いのとを擇り別けて居ります、此女は
 重にも福建、廣東あたりから這入つて來る者ださうであります
 夫から樟腦は專ら生蕃との境の山に寄つた所にあるさうで
 す、是もナカ／＼澤山あるものと見ゆまして私共が日々遣つて
 居るテーパールや硯篋杯は皆な樟を以て拵へてあります、夫から
 砂糖は最も南の方が宜しいので此砂糖の種類はナカ／＼澤山
 なもの六十餘種もあると云ふ事であります、米は先づ中央部が
 宜しいさうです、承はるに北の方は一年に二度收穫し極く南端
 は一年に三度中程は二年に五度收穫がある、申す事でありま
 す、支那人は臺灣の米が大變宜しいと申す事を書物に書いて居
 りまするが日本の米から視るといふも宜しく無い様でありま
 す、既に或る武官が話して居りましたのに臺南で極く上等と云

つて製して居ますから是は生蕃と貿易の道を開けば日本人も利益を得られやうと思ひます、其外粗悪ながら石炭があり、ますし又砂金、硫黄、杯が處々に出ますし、石炭杯も、鶏籠港あたり、にあり、す、即ち日本で申す、菊目、石土地の者は、姥姑と稱へて居、るもので、製して居ります、社寮、嶋の漁人の家は七十戸計りあり、ます、皆な此姥姑を、モルタルで、以て煉瓦家の様に、搦造して、辨、植物の方で申せば、藍、烟草、と云ふ様なものが、澤山に能く出来、す、又生蕃の物産は、十カ、く、耳新らしいものが、あります、先づ植、物の類で申しますと、籐、通草、是は細工物に用ゐます、又藥品、で申しますと、石屏、金線、蓮、鹿茸、其の他、鹿皮、獐皮、等、であります、而して生蕃の地へ入つて、是等の物産と交易する品物は、どんな、物かと申しますと、紅色の毛糸類、更紗、木綿、白の麻布、藍布、つげ

の、櫛類、剪刀、煙草、鹽、米と云ふ様なものであります、そうして生蕃、は、固より、深山であり、ます、から、樟は、勿論、朱檀、や、黒檀、や、大さ、さ、竹、杯が、澤山ある趣であり、ます、清初の人の生蕃に關係した詩や文やを見ますと、生蕃は、全く、裸、體の様にあります、が、今日御覽に入れ、ます、寫眞の有様では、相、應に、肌は、覆ふて居ります、から、之を以て見ますれば、追々に、彼、等の、社會と雖も、進歩のして居るものと、思ひます、次に、鳥獸の事を申上、ます、が、先づ、郊外に出て見ました所では、白鷺が、澤山居ります、す、雀、や、燕、は、日本と同じ様に居ります、す、鷺も、居、り、ました、が、鳥は、一羽も居りませぬ、此鳥といふものは、寒國の鳥、と見へ、ます、彼の地では、此地から、參つた人が、臺灣島と稱する一、種の鳥があり、ます、是れは、鳥鷺といふもので、丁度、鶴のやうに、黒、い、鳥で、尾羽の端が、少し割れて居ります、田舎へ參りますと、澤

さうして田作の方はさう云ふ有様かと申すと私が参りま
 したの九月初めでありました。其時臺北あたりは丁度二
 番目の稲が穂を出しかけた位でありました。夫から十二月の初旬
 には田を鋤いて居りました。其鋤き方は即ち水牛を以て日本
 で用ゐる鋤鉄と同じやうな物で致して居ります。唯々十月の末
 頃に稲を收穫する所を見ます。日本には少しゆがんで居ります
 つて居ります。先づ鎌は日本の物よりは少しゆがんで居ります
 が餘程仰向いて居て、丁度  斯んな形をして居る。夫から稲
 を扱く所は稲扱器械は用ゐて居らない。夫はナユット一石入位
 の桶の底へ四つ車が附けてあつて桶の向ふへ綱を附けて何處
 へでも引張れる様にしてある。其桶の縁は四分一位の所を明け
 て其四分の三は蚊帳の如き物で四つ柱を立て、高さが一間半
 ばかりの所を圍ふてある。是は丁度江州あたりでやつて居るの

山に居ります。獸の中では鹿とか獐とか或は兎狸の様な物も居
 るさうであります。國姓爺の淨瑠璃本に虎狩の段といふのが
 あります。が虎は臺灣には居らぬさうであります。
 田地は今日臺北近傍で求めます。ならば大抵彼の一甲が六十
 圓位するさうであります。夫れで農作の事にしましても随分日
 本の様な肥料を施して日本の様に耕耘するからば非常に長い
 米が澤山に出るだらうと思ひます。それが大分内地とは違ふし且
 達とも話ししました。が地味といふものが大分内地とは違ふし且
 又氣候が非常に違ふから能く吟味をしなければ果して日本の
 様あやう方で實際旨く出来るや否やと云ふ事はナカ／＼分ら
 ぬ。之を改良するには先づ地味の研究を致し且如何なる肥料が
 適するか試験をした後で無ければ容易に手を下だす事は出来
 ないだらうと言はれました。が私は尤もこの話であると思ひます。

た所を見るにナカク巧なものである、又欄間の様な所に唐草を抜いて居ると其の所を見ましたに其板を能く鉋でかき上げて居る、其鉋も日本とは反対で向ふへ突いてかなげましてさうして唐草を其上へ描いて置いて其唐草を切り抜く器械がある、夫は竹で弓の様に拵へて其弦に當る所が真鍮で極く少さい、錫の様な齒が附いて居つて夫で唐草の繪の所へ錐で穴を明けて其處へ齒の附いた真鍮の弦を通し弓に引きかけ弓の處を手で持つてエナクと挽き廻はして參る其挽き通して悪い所になる、と弦を外して又別の所で必要の所へ穴を明け、夫を通して挽く、夫で段々、とさう云ふ風に挽いて行く、と板の上を描いてある唐草の模様は下へボマリと落ちて跡へは唐草の穴が美しく出来て居る、極く細密な鏤であるから出来ない様である、非常に巧みな物が小刀にて削ると云ふ事は出来ない様である、非常に巧みな物が

と同じ仕方であつて其四分の一位の所へ木を横へて其上へ竹が横に結び付けてあつて、稻の中へ落ちて仕舞ふ、其近邊に刈りて居つた稻を打ち落して仕舞ふ、其桶に附けてある綱を引張つては他の所へ行つて刈つてある稻の粉を取る様に居る、

工業付花樹

夫から工業上の事に付ては彫刻杯はナカク上手と思ひます、先づ町々にある神社佛閣には大抵柱は石が用ゐてある、又は壁には石が箱め込んである、其柱や壁の石に彫物がしてある、其柱には龍の卷き附いて居る所を彫つたり、有様は實に巧みな物であり、彫つたり、仙人杯を彫つてあり、す、有様は實に巧みな物であり、また、且、又、其製作して居る所を見ると、誠に悠然として、何日掛つても、構はぬやうな有様で、ユツ／＼とやつて居ります、出来上つ

出來る、此器械は私には未だ見聞が狭いが日本では見ない器であ
 ります、其外佛像若しくは置物の彫刻杯は十カゝ巧みに拵へて
 居ります、夫から又一層感服したのは大稻埕の入口に人形を拵
 へて居ります、夫は全く土で拵へて其上を繪具で彩つたもので
 あります、是は人間の容貌、身體若しくは寫真を見て拵へます
 が實に活寫しであります、夫は彼地に居る人は能く知つて居り
 ます、が非常に喝采を博して居ります、又臺灣の竹は肉があつ
 くねばり氣が強いののでいろゝの細工を是で致します、腰掛寢
 臺天秤棒の類の拵へたのがあります、大へんよく出來て居り
 ます、夫から染木綿を日本で申せば打盤へ上せ棹で打つ所を彼
 地では大きな切石の盤を下へ置いて其上に灣形の石を置いて
 其石と盤の間へ心木に巻いた木綿を一人の人が敷いて居つて
 又一人の人が灣形の両端を足にて踏まへて上へあがつて落ち

ない様に兩柱の横木を纏まへて居る、而して右へ踏み左へ踏み
 すると下に巻いてある木綿が自然に熨せて行く様になつて居
 る、夫から綿を打つ所があります、夫は日本と些とも違ひませ
 ん、其他花簪の様な細工物は十カゝ巧みな物であります、先に
 申した生簪にある通艸は花簪の唯一の材料であります、今簪に
 付てナユット御話を致します、先づ紳商の花簪を用ゐるのは餘
 り彼地では上等とは致しませぬ、先づ紳商の娘や或は藝者杯は
 皆天然の花を頭の兩脇に挿して居ります、尤も用ゐる花は玉蘭
 壽蘭花、月内香等であつて實に香氣の高いものであります、モウ
 其花を簪にした女が居ります、通常の蘭と同じ形をして居つて
 と満ちて居ります、玉蘭の花は通常の蘭と同じ形をして居つて
 木は紫陽花の木の様であります、壽蘭花の木は山茶花の様であ
 つて花は粟粒の様な黄な垂れた小さい花であります、之を簪に

する時には其花ばかりを存して葉は皆去てます、月内香といふものは面白い花で丁度垂の様な葉で花はマア玉の管を見たり、なものであります、夫は夜分になる、非常、に香氣を發するもので、其外臺灣の草木の花は大抵春夏秋冬絶へませぬ、皆香氣の多いものであります、仙丹花杯は土地の人が非常に珍重するものであつて朱色をした花であります、此の女の管にする花は割合高價なさうです、さうして樹木は生蕃の方、前に申す通り、陰森として生ひ茂つて居るさうであり、するが臺北には大きな樹木はありませぬ、或人の説には樹木が澤山有ると生蕃人が出て来て害をしてならないから、夫で成る丈け大きな木は伐つて仕舞つたものであると申し、するが果してさう云ふ譯でありませぬ、否やは知りませぬ、がどうも大きな木がありませぬ、故に衛生上にも自から缺くる所があり、はしあいかと思ひます

臺灣に參る者は二十日も経ちますと顔の色が黄緒くなり、す、是は或る説では酸素が少く窒素が多い故であると申して居り、ます、が果して然らば、今日より樹木の植ゑ、繼つと云ふ事が極肝要であらうと思ひます、既に澎湖あたりに一本も木の無い所であつて唯畑には芋と落花生が出来る位、おもの、ださうで、あります、が此處には何か鹹氣に堪へる樹木を植ゑ付けねば、ありません、と思ひます、夫から序でに御話し申します、が臺北近傍に、其葉は日本の榊の葉を見たり、様なもので、是は鶏籠あたりにも、山見ゆます、其根は塲所に依り、ましては大きな石を擲んで居つて、實に風流な體をして居ります、夫を土人に聞き、ます、と即ち、かと聞き、ます、と書き、ます、と松柏と書き、ます、是は諸君の御参考の爲に御話

をして置きませす、

結論付商賣言語

先づ概略右の通りの有様でありますから是から最も急務中の急務と存じますのは臺灣に取つては彼鷓鴣嶼あり蘇澳港なり澎湖嶋なり打狗港なりの長い港を浚渫改良を致しまして軍艦其他商船運輸船等の寄り付きを便利にしなければならぬと存じます、其他道路の開通堤防の築設橋梁の架設等は最も必要であります、尤も道路と共に鐵道の延長をしてどうしても南の端まで参る様にならなければあるまいと思ひます、而して電線の架設は勿論でありますし、郵便電信局の設置といふものも偏く致さなければならぬと思ひます、且又今日の日本から参りまする航路を擴張致して尙ほ鷓鴣嶼より澎湖嶋安平打狗等へ行き進んで廈門香港あたりまでも航海を開かなければなるまい

と思ひます、斯様に航路が擴張にありますると私の考へまするには商業の取引上に一つの變動を起すかも知れないと思ひます、フヲチルを求めまするに一ヤイルが四十五錢であります支那人の店で買ひますれば同じ品で一ヤイルが二十五錢であります、是は何故に是程の差があるかと申せば日本へ参つた品は段々長崎の方から廻はつて運賃を餘計取られて参るから高いのであらうと思ひます、支那人のは香港から直々に皆取寄せるものでありますから運賃の掛り様が少ない斯かる有様であります、から此航路が擴張になりますれば西洋から來るものは直ぐ香港から臺灣へ這入ると斯ふ云ふ風になりまして或は日本への輸入物の中繼所になりはしないかと思ひます、夫で商賣をする人は餘程能く調査をして掛らなければあるまいと思ひます、今

日の有様を見ますと内地人は此創始の場合を機會として一攫萬金の積りで少さき物品に至るまでも非常の高價を貪ります。夫が爲に却つて支那人の店へ這入つて買ふ様になつて居ります。殆んど日本人の錢は支那人の手に落ちるといふ有様があらざる、さうして一體彼地に居る者は勿論追々に日本の言葉を彼等が知る様にならなければなりません。今日この所ではどうして相應に土地の言葉を覺えないと彼等の情態を明かにする事が出來さい、唯々眼前に見ゆる所の豚尾鬚の工合とか女の足の小さいとか、着物支那人の風をして居るとか云ふ様なことは夫は表面でありますから誰が見ても見ぬます。夫は如何なる思想を持つて居るか、如何なる生活をして居るか、如何なる手段に依つて居るか、如何なる必要の點に至つたらば夫を探り出すにどうして

彼等の言葉を能く知つて彼等と親しく交際をして見なければどうしても分りませぬ、故に日本人は臺灣語を覺ゆる臺灣人は日本の語を覺ゆるやうにして双方思想の交通をなすこと本嶋後來の進歩上に大に必要なることと考へます。又臺灣の言葉は甚だ六ヶ敷いかと申すに私の積りで夫程六ヶ敷い事は無いだらうと思ひます。支那の音は丁度四聲即ち平上去入で分つて居ります。入の此四聲は入聲に上聲、下聲、去聲、入聲の四聲が上の平聲、下の平聲、上の上聲、下の去聲、上の入聲、下の入聲と云ふ様になつて居ります。夫で支那に久しく居つて支那の言葉に練達した人の話を聞きます。順序を以ては斯様に八聲にまでも音聲が分れて居ります。土臺としてさうして話の前後の工合から音を響かして行くならば、程六ヶ敷い事は

無いと申しましたさうして一體に言葉の数は少ない様であり
 ます、例へば譯の通せない事は「フトン」とか否と云ふ事は「ポー」と
 云へばどの場合に用ゐても分る様にあつて居る夫で上等の社
 會には種々の品の宜い言葉もありませうが下等社會の用ゐて居
 る言葉は至つて少ない様であります例へば野菜類の漬物がど
 の様な種類の漬物であつても土人に示して名を聞くと鹽菜く
 と云ひます又どんな野菜類でも一様に之を菜頭と云ひます、さ
 れば今日の場合は私共の考では阿片を禁止するとか女の足を
 大きくするとか豚尾髪を断つとか云ふ様ある事は先づ第二段
 に置いて恩威寛猛極めて宜しきを得て彼をして世が太平にし
 て安寧の喜ばしい樂しきと云ふ事を早く知らしむる様に即ち
 我が陛下の御仁徳を感服せしむる様に致すのが急務であら
 うと思ひます之を宜しきに適はするにはどうしても我田に

水を引く様でありますが交通の事業といふものを第一に成就
 して然る後に衛生の事であつても兵備の事であつても殖産興
 業の事であつても初めて宜しく行はれませす、此數の者が宜しく
 行はれて然る後に全島が安寧になつて彼の標悍無頼の人間が
 善良な人間になるだらうと思ひます、今日に當つて若し此大體
 の方針を誤るやうな事がありましたならば即ち此事をなした
 り彼事をなしたり一定の方針といふものがあつてさうして出来
 る無益なる大金を使ひ貴重なる人命を多く失つてさうして出来
 ぬといふものは格別見る事が出来ないだらうと思ひます、
 此臺灣は最初より幾々述べました通りの有様であつて其國
 柄たるや實に物産に富み又南方に向つて交通上に於きまして
 も重要な場所即ち我邦から申せば南門の鎖鑰とも申すべき所
 でありますから外國人は今日非常に注目して居ります、彼土地

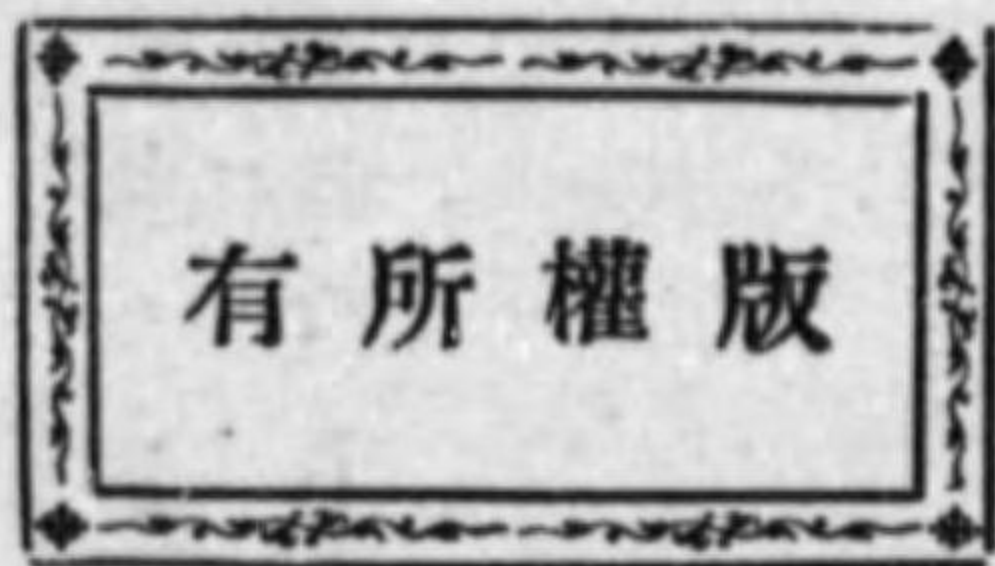
斯う云ふ有様でありますから諸君は何卒臺灣嶋には重きを置かされて萬般の事を能く調査をなされてさうして種々の事業を爲せらるゝ人は先づ能く其事實を探索して然る後に適當に施行せらるゝ事に致されぬと今日までのやうな卒然たる多くの人のやり方でありますと必ず失敗を招いて他人の唾ひを受ける様になる事と思ひます故に吳くも宜しく御注意になる事は御自身の爲且國家の爲と思ひます、昨年九月の始に彼の地へ参りまして十二月の初めに彼の地を出立して上京致しました此の間晝夜公務に執掌しまして其餘暇を以て種々の事を調査致しました此の僅かの時間になりまして本論であります故に其誤謬又は至らざる處も澤山あらうと實は慙愧に堪へませぬ最も私に再び渡臺致しますに付きまして諸君に再會の榮を得

の紳士杯は申して居りますに臺灣が日本の版圖に歸したと申して外國人は非常に羨んで居る其有様を評して言ふならば丁度臺灣は色娘を見たやうなものである斯様に申して居りまする斯かる場合でありますから彼等は自分の損徳に關係する事は容赦なく攻め掛けて來るといふ有様である故に今此處置を宜しきに計らう事が出來なかつたらば折角今日にまで彼の世界に轟かした所の日清戦捷の英名といふものは唯々此日清戦争最終の始末とも謂ふべき臺灣嶋の處置に於て忽ちに打ち毀して仕舞ふ事になりはせぬかと私は寔に杞憂に耐へませぬ、併ながら當路に其人がありまするから決してさう云ふ事はありませぬ、立派なる揚所に立つて此所置に依つて尙は又日本の光輝を世界に煌かす事が出來るだらうと深く信じます、

て其誤謬の處は是を正し又欠漏は補ひまする考へであります併し本論に付きましては秋山啓之、木村亮吉、古川五郎及び總督府御備ハンセン等の諸氏の助力により獲ました所も澤山であります是れは此に諸君の前に明言致して右の諸氏に感謝の意を表する所であります、

臺灣 嶋 終

明治二十九年三月廿五日印刷
 明治二十九年四月五日發行



發行者 青木恒三郎
 印刷者 今村謙吉
 印刷所 福音社
 發賣所 青木嵩山堂
 製本發賣所 青木嵩山堂
 賣捌所 嵩山堂支店
 全 山田直三郎
東京市日本橋區通一丁目拾七番地
 大阪府四區土佐堀三丁目三十八番屋敷
 大阪府四區土佐堀三丁目三十八番屋敷
 東京市日本橋區通一丁目
 大阪府東區心齋橋筋博愛町角
 勢州四日市港整町
 京都市寺町二條上ル

定價三拾錢

2/35

新 版 廣 告

末廣鐵馬居士著 政治小説 戦後の日本 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

江見水陸著 小説 花車 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

文庫 小説 花車 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

ちの浦浪六著 小説 左衛門 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

幸田露伴著 小説 さふね (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

幸田露伴著 小説 菊の濱松 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

幸田露伴著 小説 ひとりの寐 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

武田仰天子著 小説 局 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價四十錢郵稅八錢

江見水陸著 小説 朝 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價四十錢郵稅六錢

江見水陸著 小説 海底の錨 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

江見水陸著 小説 木津の篝火 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

江見水陸著 小説 大軍艦 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

村松柳江著 小説 雪の花園 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

江見水陸著 小説 遠山霞 (新) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

江見水陸、岡戸浩合著 小説 女の顔切 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

日清新小説 枕 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

ちの浦浪六著 小説 草 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

ちの浦浪六著 小説 後編 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

ちの浦浪六著 小説 海賊 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

ちの浦浪六著 小説 征清軍記 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價五十錢郵稅十錢

ちの浦浪六著 小説 古賀市 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

ちの浦浪六著 小説 魚屋助左衛門 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

新 版 廣 告

幸田露伴著 小説 五重之塔 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

幸田露伴著 小説 雪 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 花間 鶯合本 (三) 西洋綴美本 全一冊 定價四十錢郵稅六錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 明治十年日本 (四) 西洋綴美本 全二冊 定價六十錢郵稅八錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 旅行 (八) 西洋綴美本 全一冊 定價四十錢郵稅六錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 南海の激浪 (三) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 閣 (三) 西洋綴美本 全一冊 定價二十五錢郵稅四錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 夜鴉 (三) 西洋綴美本 全一冊 定價二十五錢郵稅四錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 手箱 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十二錢郵稅二錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 黄金之花 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十五錢郵稅四錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 東亞之大勢 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

末廣鐵馬居士著 政治小説 北征錄 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅四錢

山田美妙著 政治小説 白蘭 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十八錢郵稅四錢

山田美妙著 政治小説 園の二葉 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十四錢郵稅四錢

山田美妙著 政治小説 葛の裏葉 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十四錢郵稅四錢

山田美妙著 政治小説 盜賊秘事 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十錢郵稅二錢

關道軒著 政治小説 日本之光輝 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價二十錢郵稅六錢

大石正巳著 政治小説 日本之二大政策 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價三十錢郵稅六錢

村松恒一郎著 政治小説 日清海陸戰史 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價五十錢郵稅十四錢

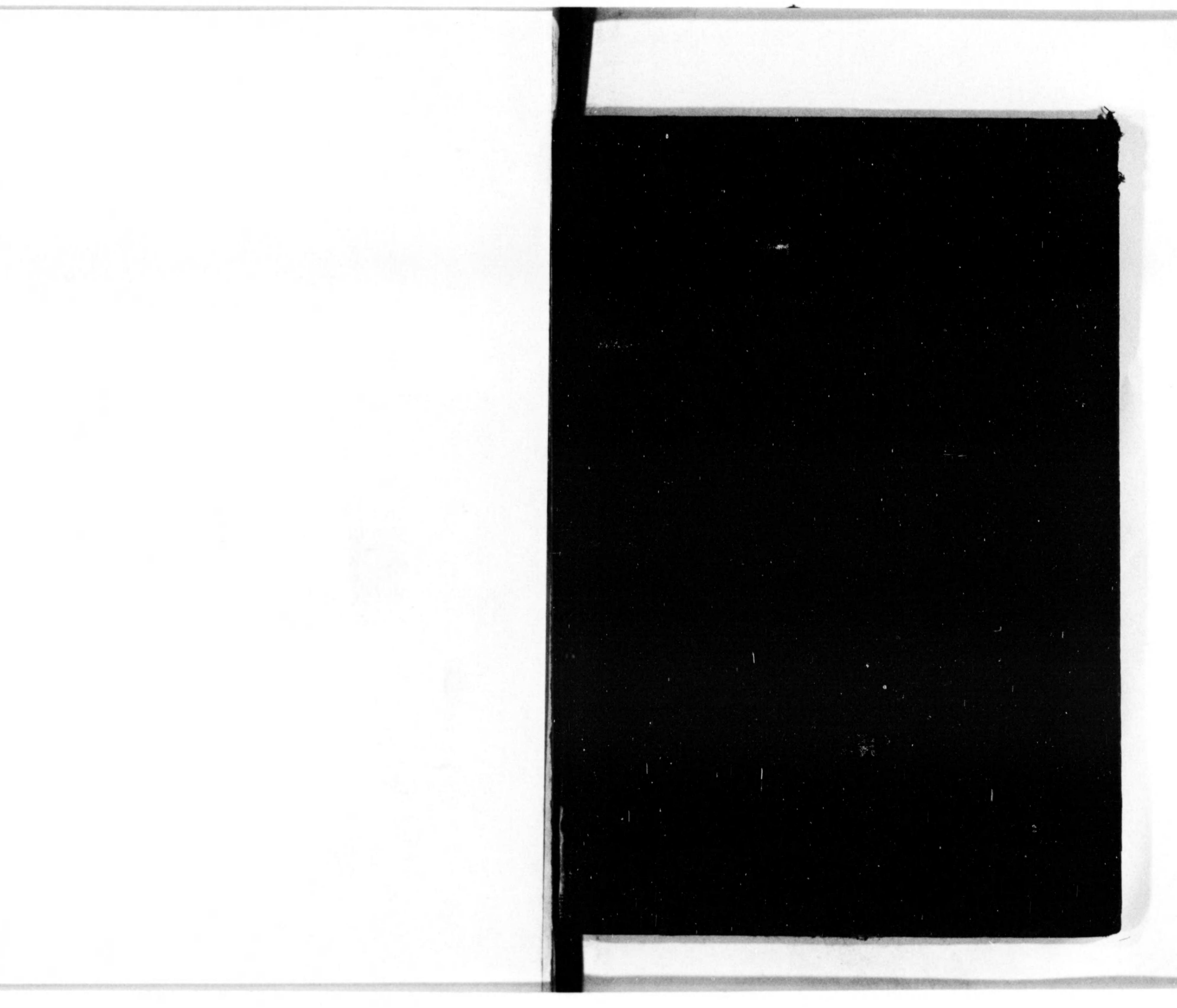
原抱一庵著 政治小説 新 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價十錢郵稅四錢

村松恒一郎著 政治小説 福島大佐傳 (再) 西洋綴美本 全一冊 定價廿五錢郵稅六錢

新 版 廣 告

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|---|--|---|--|--|---|--|--|--|---|---|--|---|---|---|
| <p>新三味線獨習之友
音樂家管尾竹軒著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>手風琴獨案內(五)
音樂家管尾竹軒著
折本美製 全一冊
正價二十錢郵稅四錢</p> | <p>新式速記術(再)
音樂家管尾竹軒著
折本美製 全一冊
正價二十錢郵稅四錢</p> | <p>富蘭克林自叙傳
立志
折本美製 全一冊
正價十八錢郵稅四錢</p> | <p>舊夢談
林有造氏著
折本美製 全一冊
正價十八錢郵稅四錢</p> | <p>汽船之發明
利器
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>汽車之發明
利器
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>龍
村松恒一、武信由太郎著
折本美製 全二冊
正價四十錢郵稅四錢</p> | <p>日本俗曲集
音樂家管尾竹軒著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>稽古
岡本半溪著
折本美製 全一冊
正價十二錢郵稅二錢</p> | <p>尺八獨習之友(八)
霧聲散士著
折本美製 全三冊
正價四十五錢郵稅十錢</p> | <p>尺八樂譜唱歌集
霧聲散士著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅二錢</p> | <p>篠笛獨習之友(再)
霧聲散士著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>萬藝玉手箱
花柳紳士、山口米子著
折本美製 全一冊
正價十二錢郵稅六錢</p> | <p>柔術劍棒圖解秘訣
松之倉井ノ口松之助著
折本美製 全一冊
正價十二錢郵稅四錢</p> | <p>武道圖解秘訣
松之倉井ノ口松之助著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> | <p>劍舞獨習圖解秘訣
福井茂兵衛著
折本美製 全一冊
正價十五錢郵稅四錢</p> |
|---|--|---|--|---|--|--|---|--|--|--|---|---|--|---|---|---|

73
53



73
53

026619-000-8

73-53

台湾島

土居 通豫/述

M29

ADD-0303

